
クロス・エンド 0・1日目

日向 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・エンド 0・1日目

【Nコード】

N5163Z

【作者名】

日向 葵

【あらすじ】

そこは住む人全員が何かの力を持つ都市「アイリスの花びら」

その中でも「特別な力」を持つ鷹月翼は、突然の戦闘中に吸血少女（？）と出会う。

一方、ほとんど力も持たない雉本一樹。彼にも謎多き「塔の少女」との出会いが。

やがて交差する二人の話。学園と、監獄と言われる都市に隠された秘密とは？

そして人々は、交差する結末に何を見る？

第01章「黄昏の遭遇戦」

夕暮れ。追う魔が時。黄昏時。

照らされるコンクリートはみな夕日の色に染まり、日暮れの間を知らせていた。

……そんな時間帯に空を見上げて赤くなるのを見てみると、まるで燃え上がっていくようで、世界が黄昏るのが感じられる気がする

「なんて、くだらないこと考えてる場合じゃない、か」

自分に言い聞かせるように呟くと、少年は歩き出した。

……見事に道に迷っているところだ。

といつても、別に迷宮にいるわけではない。家の近くで迷っているだけだ。しかし、今の正確な時間も分からないまま、かなり長い時間歩き続けていた。

「こつちで合ってた気がするんだけどなー」

……そろそろ着かないかな……

引越してきたばかりで道を何も知らないのに、近所をぶらついてみようなどと思ったのが間違いだった。

そこで、少年は『鷹月 翼 様』と書かれた小さな封筒を取り出した。

……地図とか入ってなかったかな……？

鍵の入っていた封筒を取り出して調べる。だが地図があったところで、現在位置が分からないのでは役に立たないのだ。結局何も見つからず再び歩き出す。

「まったく、自分の家にも帰れないってのは笑い物にされちゃうな」自嘲気味に笑いながら、何度目か分からない曲がり角を曲がったと、

「袋小路……これじゃいつまでたっても帰れないぞ」

壁に手を付いて軽くため息を吐くと、翼は来た道を引き返そうと

した。その時、
ぽたつ。

何かの液体が、頬にかかった。

「なんだ……雨？」

拭った手のひらを見る。それは雨ではなく、赤い色をしていた。

反射的に空を見上げると、翼の目に映ったのは落ちてくる人だった。

「何っ……！」

人が、そのまま地面へと叩きつけられる。腕に大きな切り傷を負っていた。

……この傷から落ちた血が、さっき降ってきたのか。

意識も無い所を見ると、誰かにやられたのは間違いないようだが、
一体誰が……

手を伸ばそうとして、刺すような視線を感じ、翼は振り返った。

……殺気。

建物の縁に、夕日を背にして少女が立っていた。両手には異形の武器が二つ。鈍角三角形に円のくり抜きがあるそれは、剣というよりも刃というのが正しいようだ。その二つの刃を赤く染め、身に纏う制服も返り血を浴びていた。

そして、両手に武器を持っていると感じさせないくらいに軽々と跳ぶと、気絶している男の前へと静かに降り立ち、刃を向ける。

……駄目だ！

翼は咄嗟に、少女の前へと両手を広げて立ちふさがっていた。

「何の真似？」

「誰だか知らないが、目の前で人が人を殺すつてのを黙って見ても
いられないんでね」

「この人たちがただの人だというの？」

少女は一瞬で刃を収めると、鋭い眼でこちらを睨みつけた。

「少なくとも、この『アイリスの花びら』では同じ人間だ」

「ふん」

少女は気に入らないというように鼻を鳴らした。

……まあ気に入るはずがないよな。

この天空要塞都市『アイリスの花びら』では人間法という法律によつて、そこに住む全ての人型の種族が人間として扱われている。その分、ただの人間などほとんど住んでいないのが現実だ。つまりここは厄介者のための牢屋なのだが……

……よく今の無茶苦茶な屁理屈で止まったな。

「監獄の鍵を盾にして平和主義を唱えるとは、恐れ入るわ」

「だったらどうする？」

「どうもしないわ。私はその人を片付けるだけよ」

少女の言葉は途中で止まり、翼は突き飛ばされていた。

……なんだ！？

杭のようなものが、こちらのいた場所に突き刺さっていた。気絶していたはずの男が、腕をこちらに掲げているのがなんとか見えた。突き飛ばされなかつたらと思うと、背中に嫌な汗が流れる。

「これを見ても、まだ平和主義を唱える？」

少女の問いが響くと同時に、倒れていた男がゆらりと立ち上がった。少女の両手にはもう刃が握られていた。

「はっ
っ！」

少女は一步踏み出すと、一気に加速する。

……私は、私の使命を果たすまで

そこからは刃と杭の応酬だった。斬撃と刺突が飛び交い、しかしその中で止まることなく、舞い踊るように突き進む。

弾き、切り裂き、踏み越え、斬り下ろし、回って、防御し、回り斬り、潜り抜ける。そうして少女はどんどん距離を詰めていく。

……その邪魔は誰にもさせないわ。

相手は腕の周りの空間から杭を出していた。最初は片腕を使って

いたが、今は両腕だ。杭の本数も増えていたが、特にこちらが気にするほどの攻撃ではない。

「はあッ　！」

そして、気合いを込めると、迫りくる攻撃を一気に断ち切った。さらに距離を詰め、相手の目の前に降り立つ。

「これで終わりよ」

刃を突き付けられた男は、しかし笑っていた。

「どうかな」

待っていたと言わんばかりに、男の周囲の地面から一斉に罾が顔を出した。

「　っ！！」

……無数の杭!?

とっさに回避はした。しかし、大量に突き立つ杭から逃れられず、その檻に囚われてしまう。次の攻撃に身構えたこちらに対し、男は素早く背を向けた。

「待ちなさい！逃げる気!？」

その言葉に、男は笑みを浮かべながら答える。

「待てと言われて待つヤツはいないだろ、だが……もう少し確実に逃げたいんでな」

今度は、真っ直ぐに翼の方へと向かっていた。

翼は男の反撃を見ていた。大量の杭が地面から飛び出すと、少女を追尾する動きをしていた。

……あの少女は大丈夫なのか？

上手く避けたようだったが、しかし躲されることが前提だったよ
うで、杭に囚われているのが見えた。だが、男が背を向けたのを見てホッとしていた。逃げるつもりのようなようだ。

……だが、これでいいのか？

翼は悩んだが、無用な争いが起きるよりはマシなはず、と思った。その時、少女の叫びが聞こえたが、何を言っていたのかは分からない。だが、とっさに体が避けていた。

そう、先程の男が襲いかかってきていた。後ろの壁に穴が開いていることに危険を感じる。

「初撃を避けられるとはな……」

対峙するが、このままでは勝ち目などない。

……というか、今は戦う気なんてない。

とにかく逃げるだけならばと思い、身構える。二撃目も躲した。

だが、その先のことを考えてしまった。自分が避けた物が伸びていく。その先には、少女がいた。

「っ……！」

……争いを避けても、結局は何も守れないだけなのか。

だが、それすらも囷だった。

少女の周囲の檻が砕ける音が聞こえると同時に、男はこちらの後ろに回り込んでいた。

「くッ……！」

「へっ、これでもらったぜッ！」

……これ、は。

驚くより先に、自分の胸に人の腕が生えている現実を認識させられた。男の腕が、背中から胸へと貫通しているのが見え、

「か……は……」

言葉にならない声を発した。と、腕が引きぬかれるのを感じた。

そして、自らの血によって出来た血だまりへと倒れた。

第02章「決着の一声」

少女は檻が碎けてようやく自由を得た。

しかし、今度は怒りに囚われていた。

「お前！！」

少女が相手に向けて怒りの声を放つ。だが、それも笑って受け流された。

「戦いの場に居たらこういうこともある。ま、こいつの運がなかったのさ」

「……ならばこの事態は私のミス　私が、私があいつをすぐに始末できなかったから！」

溢れる怒りは相手と自分。両方への怒りだ。だが、今は目の前の相手に集中する。意識が研ぎ澄まされ、感覚が鋭くなっていく。自分の武器を手にするために昂っているのが分かる。

少女は己の手にある異形の刃を構えた。

「行くわ……！」

だが、相手は手についた血を舐めると、ニヤリと笑った。

「これで終わりだ。そら、行けッ！」

相手の周りの空間から一斉に血に塗れた杭が放たれた。先ほどとは比べものにならない数。

「フン」

だが、少女はそれを鼻で笑った。

「……くだらない、その程度で私に勝とうというの？」

そしてその杭が一本残らずピタリと止まった。

「な……？」

「……馬鹿な奴ね、まったく出来が悪いわ。」

実際、相手は何が起こったのかさえ、理解すらできていないだろう。

「う……？動けよ、おい、動けッ！オイ！」

「まったく、あなたたちはあきれほど低能だわ。血を使うのなら、私は何者で、何が出来るのかくらい知ってからかかってきなさい」
…… 本当に、くだらない戦いだわ。

その直後、大量の杭が一齐に砕け散って粉々になった。気圧され、一歩も動けなくなった男に対して、少女は両手の刃を合わせて一つにし、正眼に構える。

大きな三角形となった武器のくり抜きは、クローバー型となっていた。

構えると武器は再び変形を始め、三角形が半分ほどの所から、先ほどの合わせ目に沿って口を開けるように動く。そして内側に鉄の牙が並んだ。

「さて、これで終わりよ」

その瞬間、目の前の男の顔が少し引きつった気がしたが、そんなことは気にすることも無く、鉄の咆哮は一瞬にして目の前の空間を喰らい尽した。

「しかし、どうしたのかしら……」

目の前には翼が横たえられていた。先ほど胸を貫かれ、当然のようには脈もない。

……死体の処分となるとちょっと面倒ね。

しかし、こうなったのも自分のミスのせいだ。なんとか後始末をしなければならぬ。

「ん……」

……ん？

声が聞こえたような気がしたので、周囲を確認する。はっきり言って、誰かに見られるのは避けたい。一応、人が寄らないようにしてはいるのだが、この少年は何故だかここに近づいてきてしまった

のだ。

……気のせい？

「あああああ！びっくりしたあ！」

「きゃあああああ！！！」

いきなり声を上げると、倒れていた翼は起き上がった。二人の視線が交錯する。時が凍りついたように、二人ともその場で固まったが、

「あー、えっと。大丈夫？」

「くっ……」

「えっ？」

「あははははははっ！何かしらそれ？何かの冗談？」

……大丈夫、ね。

それは普通こちらが聞くものだ。胸を貫かれて無事な能力など、聞いたこともない。

「いや、さっきは変な奴がいたし、どうなったのかな、と」

「あなたはつくづく変わっているわね。大丈夫。さっきの人なら片付けたわ」

そう言っ指差した後ろには、男と共に挟り取られた空間があった。

「これはすごい、な……」

「私たちはこういうことが出来る。それくらい分かっているのではなくて？」

「そうだな」

そう答える目は、どこか悲しそうだった。

そして、二人でため息を付く。

「さて、あなたのことだけど……」

と、少女が話を切り出そうとした時だった。

「じゃあ、俺はこれで」

そんなことを言うのが早いか、翼は一気に曲がり角まで駆け出していた。

「待ちなさい！」

制止の言葉は届かず、袋小路から唯一の出口となる道を走り抜けられていた。

……そんなもので逃げ切れるはずが……！

だが、少女が曲がり角に辿り着くと、

「いない……！？」

すでに翼の姿はそこになかった。まるで忽然と消えるようになり、少女は振り返って確認したが、そこには抉られた床と壁、そして翼の血だまりが残っているだけだった。

「……ふう」

……逃げられたものは仕方ないわ。たとえ、どこに逃げたって少女は翼の血だまりに目を止め、もう一度元の場所へと戻った。

そして手をかざすと、まるで生きているかのように血がそこに吸い寄せられ、集まっていく。さらに、一つの球体へと変化し、最後には集まった血がワイングラスのようになった。それを掴み、血の杯に口を付ける。

「……美味いわ」

微笑みを浮かべて、翼が走り去った曲がり角を見つめる。

「必ず……見つけ出して見せるから」

少女は曲がり角を見つめ直し、もう一度だけ口元に笑みの表情を作った。

全力で走っていた翼は、立ち止まると確認のために振り向いた。

「もう、追ってきてはいないか」

一旦壁に体を預け、周囲を警戒する。

……しかし、何だっただ。

そこで自分が道に迷っていたことを思い出した。だが……

「あれ、ここは俺の家か……」

滅茶苦茶に走り回っているうちに、翼はいつの間にか家に着いていた。

「とりあえず、今日はもう休もう……」

疲れを感じ、一人で中に入っていった。

第03章「星闇の出会い」

夜。

その闇にそびえ立つ塔は、天に向かつてどこまでも伸びているようだ、とも言われる高さで、都市の中ではかなり高い場所として知られていた。

……昔は灯台か何かだったらしいけど。

今は何にも使われず、あまり人も近寄らない塔だ。ただ、実際に登るのにはあまり高さは無い。扉を開くと階段があるだけで、実は簡単に入りもできるが、明かりはなく、真っ暗だ。

「よっ……と」

少年は手の平に光を灯した。彼は光を操れる。それが彼に与えられた力だったが、ただそういう事が出来るというだけで、別に争いに使ったり出来るほど強い力ではない。

……段数を数えてもいいんだけど、それもなんだかな。

足元を照らしながら、階段を登っていく。いつまでも続くような、それでいてすぐ終わってしまいそうな階段。暗闇の中、ただ上り続けるだけなのに、それが逆に凄く不安になる。

……そろそろか？

だが、それにもやがて終わりが訪れる。だんだんと四角い光が迫っていた。光の扉だ。手を掛けて、開く。かすかに風を感じた。目の前にあつたのは星空だった。ただ一人その世界を見ている……はずだった。

「あなたは、誰？」

声のした方に振り向く。月明かりと、少年の光に照らされて姿が浮かび上がる。

少年と少女はそこで、初めて出会った。

少年にとって塔の上に来ることは、珍しい事ではなかった。

……特に目的があった訳じゃない、ただ何となく落ち着くってだけだ。

しかし、その日はいつもと違った。先客がいたのだ。

「あなたは、誰？」

……誰って言われてもな……？

突然そう聞かれて、何と答えればいいのか悩んだ。目の前にいた少女がどことなく不思議な感じがしたからだ。儂いような、まるで存在していないような。

……夢か幻じゃないのか？

悩んだ末に少年は名乗ることした。

「僕は雉本きじもと 一樹いっしゅ。君は？」

「イツキ？」

「そう。それで、君は？」

「……私？」

……何だか反応が薄い……というより鈍いつて感じた。

「君の名前は？」

「私、は……」

それから少女はしばらく黙りこんでしまった。ときどき悩むように首を傾げたりして、延々と悩んだ末にようやく答えをだした。

「……ア、リス」

「は？」

……なんだその偽名のような名前。本名を教えたくないってことだろうか。

髪や瞳の色を見ても、とても外国人のようにも見えなかった。が、追求するのも面倒なので気にしないことにした。

「分かった。えっと、アリス。君はここに何をしに来たの？」

「空を見る」

……ますます変わっている。

一樹は最初そう思ったが、考えてみると自分も似たようなものだったので、

「僕も同じ」

と答えた、すると、

「そう」

という返事が返ってきた。その時、アリスが微笑んだような気がした。彼女の長い黒髪が夜風になびいた。

……今日も、ここは静かだ。

「イツキ」

急に名前を呼ばれて、一樹は我に返った。

……少しボーっとしていたか。

「そろそろ時間だから、帰るね」

「ああ」

曖昧にしか返事が出来ないまま、アリスの方を見る。

「またね」

そう言うと、アリスは急に夜空へと身を翻した。

……え？

咄嗟に動こうと思ったが、足は一步も前に動かなかった。思考が反応できないまま、時間だけが流れていく。そして、静寂が訪れた。

「……はあ」

一樹はため息を一つ付いて、鼓動を落ち着かせてから一歩ずつ前が出る。そして縁から慎重に下を照らして見た。が、飛び降りた跡などは何もなかった。

「どうなってるんだ？」

塔の縁から一気に壁まで下がって、それを背に尻餅をつく。一気

に緊張が解けていた。

「本当に幻だったってことはないよな……」

……そんなはずはない。と、頭の中で自分自身が否定する。

それに、彼女は「またね」と言ったのだ。

「またここに来れば、会えるのかな……」

そんなことを呟きながら、一樹はゆっくりと塔の扉を開いた。

第04章「思考する恐怖」

夜。高宮^{たかみや} 千鶴^{ちじゅ}は襲撃を受けていた。

……と言っても、襲撃されるのは珍しい事じゃないがね。

それにどうせお遊びだ。『生徒会長』の座にいつまでもいるのが不満でしょうがない連中が、こうして襲撃してくる。

……まあ、そのたびに連中が痛い目を見ることになるのだが。

夜闇の中を一つの影が駆ける。『魔法の弾丸^{マジック・バレット}』の使い手、白羽^{しろは}

秋時^{あきとき}の銃口から弾丸が乱射された。適当に撃たれたように思えたそれは、しかし全弾命中した。

……相手にとっては痛手だろう。あの相手ならば、だがね。

「秋時、仕掛けるわ」

「了解」

その射撃が止んで始まるのは、さらなる悪夢だ。姉の鶉^{うぐいす}が使う『傲慢狩りの合成獣^{クリフオン}』は弟の射撃よりも遥かに恐ろしい力である。

……鶉の攻撃は痛手などではすまない、純粋な力による圧倒的な暴力だね。

もちろん、こちらは本気を出すはずなどないが、秋時が援護をするときもある。だが、今夜はその必要性も無いらしい。相手はもはや壊滅的だ。そんな様子を見て、千鶴はあくびをした。

千鶴はあくびをして退屈そうにしていた。

……実際つまらないだろう。

こういった襲撃など彼女は飽きるほど経験している。だが、その油断が命取りなのだ。

「……ッ！」

そう思い、少女は目を閉じて念を込めた。

……私は影を操る『影女』の力を発動する。

今ならば完全に気付かれずに狙えるだろう。影がゆっくりと持ち上がり、襲いかかるうとした。しかしその瞬間、影は見えない壁に阻まれるように弾かれた。

「……え？」

……え……何？失敗……！？

慌てて目を開き、状況を確認しようとした。だが、目の前には標的にしていたはずの人物が笑顔で立っていた。

「なっ……！」

「やあ、今回もつまらない見世物をありがとう。できれば最初から来ないでくれるとありがたいんだがね。時間の無駄だが、つい相手をしてしまっ」

「時間の無駄とは何ですか！」

思わず言い返した。だが、返事は何もない。

「そういうことは、周りを見てから言うものだね？」

慌てて周りを確認する。だが、味方は一人残らず気絶させられていた。

「まさか……」

「そうだ。キミの他にも十人ほど暗殺部隊がいたみたいだけど、少なかったんじゃないか？」

クスリと笑いながら、大げさに手を振り話すそのわざとらしい姿に、『影女』の少女はイライラした。しかし、相手のペースに嵌まっていると思えば、出来る限り冷静に問いかける。

「あ、あなた一人で、やったというのですか」

「私の能力くらい知ってるだろう？」

……そうだ。この女は史上最強最悪の能力者。

その気になれば、こちらの全軍さえ相手に出来てしまうのだ。

「でも、あなたの能力は知覚できなければ届かないはず……」

「ああ。確かにそう言ってる。それは事実だよ」

「ならなぜ暗殺部隊まで」

その言葉は、途中で遮られた。一瞬の間に距離を詰められ、その顔が目の前に迫っていた。

「考える。考えない人間は獣だ。よく考えない人間は馬鹿だ。さて、キミはどっちだ？」

「あ……え……」

目の前に現れた相手の圧倒的な存在感と言葉に対して、何も言い返すことが出来なかった。この相手は能力だけではなく、人間としての強さが違つたと少女は思った。

「ま、考えれば当たり前前の事だよ。こんな能力を持っていて、知覚が常人並みのはずがない。どう？分かりやすい答えだろう？」

「そ、そんなのずるい気がします」

思わず言い返したが、頭はまともに回らず、駄々をこねる子供のようだと少女自身も思った。

「ずるいつて言われてもね……で、雇い主は誰だった？」

「それは言えません」

「今の流れなら、言ってくれてもよかつたんじゃないか？ま、見当はついてるがね」

そう言つてクスリと笑う千鶴は、まるで幼い少女のように楽しそつだった。

「千鶴。遊んでないでそろそろ帰るぞ」

その声と共に後ろから副会長が顔を出した。

「ああ。この子、連れて帰っていいかい？いろいろと聞き出したい」

「本当にそれだけか？」

「ああ。ちよつとかわいいから、なんて思つてない」

「千鶴。本音がだだ漏れた」

そんな会話を聞きながら、少女はいろんな疲労がごちゃ混ぜになつて意識を失つた。

第05章「始まりの音」

翌朝。いつも通りの時間に目を覚ました翼は、特に急ぐこともなく学園へと向かった。五月の連休を利用した引越越しによって、数日前から一人暮らしを始めたので住む場所は変わったが、生活に特に変化はない。

……決めていたことだしな。

二年になって早々ではあったが、もとより覚悟も準備もしていただけに、翼にとっては連続していく日常に流されていくだけの出来事だ。

……昨日の出来事はちょっと予想外だったけどな。

過ぎたことは仕方ない。すでに頭から余計なことは排除してあるし、反省は充分にした。後はいつも通りの生活に戻っていくだけだ。

「高宮先輩。おはようございます」

通学途中に知り合いを見つけ声かけた。生徒会長の千鶴だ。

「おや、翼くん。おはよう」

前を歩いていた影が振り返った。と、同時に挨拶が返ってくる。

……しかし、胡散臭い笑みだ。

普段はこの笑みの表情か、何か思案している表情。そんな印象しかない。ついでに話していていつも思うが、この人は行動も性格も共に得体がしれない。

すぐにこちらを手玉に取ってしまう所など、まるで詐欺師のようだと思う。しかし、その実力は本物だ。全生徒が普通の人間ではないこの学校で、その強大な能力によって生徒会長の座に収まり、現在も生徒全てを抑えているのは紛れもない事実だ。

「なんだか、今ものすごく失礼なことを考えていなかったかな？」

「いいえ。先輩のことをものすごく尊敬していました」

……この人は心が読めるのか？

しかし、読めるなら最後まで読んで欲しい。嘘は言ってない。

そこで千鶴は顎に手を当てて考える……ポーズをした。

あれはフリだろうな、と思った。流石に付き合いも短くないので翼も分かってきていた。

「キミは尊敬してるって言うけど、その割に未だに私を先輩と呼ぶね？他の子は会長と呼んでくれるのだけれど？」

その言葉に、翼はめんどくさそうに頭の後ろで両手を組みながら答えた。

「ああ、それだったら……先輩のこと役職で呼ぶ人だけになるのが、なんとなく嫌だっただけですよ」

と、千鶴は一瞬だけ驚いたような表情をした。だが、その後は笑っていた。

「しかし、先輩というのは私の名前ではないのだから？」

「なんで俺がわざわざ先輩を名前で呼ばなきゃいけないんですか」

「そうだな。そんな必要はない」

「居たんですか？副会長」

音もなく後ろから現れた鶴に、翼は驚きもせずに対応する。

「私のことは役職で呼ぶんだな」

「それは付き合いの長さを考えて、ですね」

「ふむ。私との付き合いをそんなに長いものと考えてくれているんだね。嬉しいよ」

「最近、先輩とは前世から知り合いだったような気がしてますよ」

そんな他愛もない会話をしながら平和に学園へと向かう朝は、しかし唐突に破られた。

「見つけたわ」

「え？」

後ろから来た声。その声は凜として、透き通るようにハッキリとしていた。決して大きくないけれども響き渡る……いや、貫くような声だと感じられた。

声の主を確かめようと振り向いた翼は、そこで固まった。

「昨日……の「昨日の人」」

疑問を挟むより先に断定され、さらには軽く指差された。翼はさらに追い込まれる。

……同じ学園だった？

しかし、その疑問に脳内が反論する。こんな人今日まで、学園で見たことすらない、と。

「いつたい……いつたいどこのクラスの誰だ！」

そこに翼より大声を上げて割り込んだのは千鶴だった。

「先輩？」

「翼くん、私は聞いていないぞ」

「あ、いや、その……」

言い訳が思い浮かばず、翼が口籠っていると、千鶴はそのまま続けた。

「こんな綺麗な子がまだいるなどと、私は聞いていないぞ！」

「は？」

その場にいる全員が固まった。

……いや、副会長だけはため息を吐きつつ、やれやれと反応している。流石だな……

「ふむ、私のチェックを通りぬけるとは……なかなかやるじゃないか。ちよつと生徒会室で話を聞こう」

「千鶴、何の話を聞くつもりだ」

「それはもちろん、私との愛についてに決まっているだろう？全ての美しいものは、私に愛でられる権利がある」

「それで答えになっているつもりなのか？」

「なんだ鶴、嫉妬しているのか？大丈夫だ、私の愛は数が増えたくらいでは変わらないさ」

「お前は病院に行った方がいいんじゃないのか？」

翼は、千鶴たちが芝居で足止めをやっている間にこっそりと先に行くことにした。

……どこまで芝居なのか、分からないのがあの先輩の怖いところだけだな。

と、そこにメールが届いた。先輩からだ。

『放課後は、生徒会室にくるように』

なんだか厄介なものを抱え込むことになりそうだと、思う翼だった。

第06章「説明の時間」

一樹は朝の騒がしい教室の中、一人静かに席に付いて考え事をしていた。

……なんだか、また生徒会長が朝から騒いでいたみたいだけど。登校途中に見た風景は奇妙だった。逃げ惑う女の子を追い回す生徒会長を、副会長が力づくで抑えて連れて行くというものだった。

……一年経つても、この学園の騒ぎにはなかなか慣れないな。

「会長も、変わってる人だよな……まあ、この学園に変わってない人なんていないか」

ふと呟いただけだったが、それでも生徒会長というのは、一樹にとって雲の上のような人だ。

この学園では強い力を持っている人はもうあまりいない。昔はそれぞれ強力だったらしいのだが、今ではごく一部がそれを保っているのみだ。だが、それゆえに持っている人は強い。そしてそれを全て抑える必要があるのが生徒会長だ。

……改めて考えてみると、凄まじいな。

もちろん学園は都市の一部なので、都市を管理する『統治機関』に助けを求めてもいい。実際、実力の足りなかった生徒会長はそういった手も使ったそうさ。

しかし、現生徒会長は一年生の時に前生徒会長を実力で倒し、その後の信任投票で過半数を得て以来、不動の地位だ。まさに完全実力主義の完璧な生徒会長。将来の仕事に関しても、統治機関から話が来ているとか。

「力が弱い生徒から見ると、もはや憧れるを通り越して恐ろしい、だな」

「どうした一樹？難しい顔して？」

思考に横やりが入ったので、一樹は一旦考えるのを止め、声のした方に振り向いた。

「ああ、小春^{こはる}。おはよう」

そこには一樹のクラスメイトにして親友の小春がいた。だが、その挨拶に小春はわずかに顔をしかめ、頭を掻く。

「ああ、おはよう。……なんかそうもあっさり、自分の名前に馴染まれちまうのも慣れないな」

「そうか？ だったら苗字の雲雀^{ひばり}で呼んだ方がいいか？」

「いや、結局女っぽくて好きじゃないんだよ」

小春は苦笑いをする。

「……やはりいろいろと苦労してきた事なんだろう。」

「僕はそうは思わないがな」

「みんなお前みたいな考えなら、いいんだがな」

「だったら、何か適当なあだ名でも考えてやるさ」

「そうだな……ところで、何してたんだけ？」

「ああ……この前、お前にいろいろと情報をもたらったから、それについて考えてたのさ」

そう、小春も力の持ち主であり、それを使って自称『情報屋』をやっているのだ。中学の時からパートナーが一人いるというのだが

「……そっちにはまだ会ってないから、どんな人なのかは知らないんだよな。」

そんな訳で、先ほどの一樹の考え事の情報源は、先日小春が教えてくれたものだった。

「あれか……まあ大したことじゃない。調べれば誰でもすぐに分かることだ」

「いや、調べようと思わなかった僕は、いかに物を知らなかったのかわかり知らされたよ」

「そんなもんかね。あんな情報なんてのは、全体から見たらほんの一部に過ぎないんだが」

小春はやや自嘲気味な口調で言うと、鼻を鳴らした。

「目の前の事しか見てないと、気付かないものがあるって分かった

だけで十分だ」

「ふん、あんまり見えない事まで追い過ぎるなよ。人の手に負えるものには限度がある」

そんな芝居じみた台詞を言い合つと、二人で視線を合わせて笑いあつた。

放課後になつて、翼は生徒会室に来ていた。

正面には椅子に座つた会長が紅茶を飲み、横では副会長が仕事をこなしていた。

「それで、昨日の出来事というのは何なんだい？翼くん」

「はあ、少し長い話になりますが、構いませんか？」

「構わないよ。幸いなことに、私も暇を持て余している」

「嘘を吐くな」

副会長が言葉を挟んだ。というか、思いつきり睨んでいる。どうやら忙しいようだ。

「ふう、鶯は真面目だなあ……」

「それこそが、私がお前から目を離せない理由の大半だからな。残念なこと」

「反論できないのが悲しいよ。さて、そろそろ真面目に仕事をしなきゃなので、出来る限り簡潔に話をまとめてくれるかい？」

翼はため息を吐きながらも頷くと、数分考えてから答えた。その間も会長たちは猛烈に仕事をこなしていたが、翼が話し始めるとピタリと手を止めた。

「えつと、昨日は道に迷つてたら、戦闘中の彼女と出会つて、巻き込まれて俺が死んじゃつたつて所ですね」

……我ながら、凄まじい説明だなあ。

「なるほど」

「えっと、今の説明で大丈夫ですか？」

「ああ、まあ大体の所は分かった。というか、それだと追い回されるのも当然だな」

「確かにそうですね」

答えながら、翼は逃げたことを半分後悔していた。まさか同じ学園の生徒だとは思わなかったのだ。しかし、今でも他に選択肢があったとは思えない。

「それと、巻き込まれて殺された、と言っていたが……キミは一切抵抗しなかったのか？」

「……一応、逃げるくらいはしましたよ」

翼は齒切れの悪い答えを返した。だが、それに反応した会長は椅子から腰を上げ、不満そうな顔を見せた。

「もし本気で抵抗すれば、その辺にいる奴がキミを殺すことなど不可能だ」

「俺に切り札を出せというんですか？」

「殺されるのは避けたかったんだろう？それに、キミが私に向かってきた時は容赦なく使ったじゃないか」

「先輩を相手にするのは訳が違いますよ。それに、死ぬのは極力避けたいけど、だからってあれをすぐに使うのも……」

だが、その言葉を口にした時だった。一瞬の内に千鶴が距離を詰め、目の前に現れると眼前を指差してはつきりと言った。

「そこだ。その半端な覚悟こそがキミに死を呼び寄せる。キミの周りに死を招く。キミは何が一番大事なんだい？」

「俺の……大事なもの？」

「私に向かってきた時のキミは、もっと美しかったよ。相手も、自分も、全て失うかもしれないと覚悟した上で挑んできていた。その儂さは美しかったよ」

「……そんなものが、美しい？」

「……冗談じゃない、あの時みたいなのが日常になってたまるものか」

否定しようとした翼だったが、眼前にあつた指が口元に動き、言葉被封じられる。そして会長は言葉を続けた。

「今のキミは何でも欲しいと言いながら、自分では何もしない、わがままな子供のようだよ」

「……っ！」

言い返す言葉を探したが、翼はあえて何も言わなかった。

「さて、そんな翼くんには動いてもらうのが一番いい。一つ仕事を頼もう」

「仕事？」

「ああ、ちよつと調査をして欲しくてね」

翼の前に素早く紙が差し出される。翼はふつと息を吐くと、意識を切り替えるように集中しなおした。いつもの調子が戻ってくるのを感じる。

「最近、この学園に『情報屋』が入ってきたって言うんだけど、なかなか接触がとれなくてね」

「生徒会長は、全生徒を抑えてるんじゃないんですか？」

「ふふつ、流石は翼くん。立ち直りも早いな。……で、まあ所詮は『情報屋』だからな、実害の大きい方を優先して片付けてると、どうしても後回しになるんだ。困ったことに」

「なんだかんだ言つて、生徒会も万年人手不足ですもんね」

「まあ、信頼できない奴は周囲に置いておけないからな。とはいえ、私と鶴と秋時だけでは回るはずがない」

「え？結局三人でやってるんですか？」

「いや、予備人員も入れてはいる。だが、三人で処理しなければならぬ重要な事項もあるし、この学園には荒事がある。それは直接出向かねばならんし、もはや分身でもしないと無理だな」

翼は改めて、この生徒会長のすごさを見た気がした。だが、疑問も湧いた。

「一つ聞いていいですか」

「ああ」

「なんで俺をもっと早く使わなかったんです？そうしたら仕事だつて……」

「あまり侮らなくてくれるかな。私を誰だと思ってる」

「……こう言い切れるのが、この人の一番すごいところだな。」

「そうですね。そんな心配は無用でした。じゃあ、今回はちょっとお手伝いってことで」

「ああ、もうすぐ別の手伝いの子が外に来るから、合流して向かってくれ」

そこで、二人そろってクスリと笑う。

「了解です」

「じゃ、頑張つて」

「先輩も」

そう言い残して、翼は部屋を後にした。

「千鶴」

「なんだい？ 鶯」

「なんだかんだ言つて、面倒な仕事を押し付けたな」

「おや、話はちゃんと本気だったけれど？」

「ああ、だからお前は最後まで本気で話をして、本気で仕事を押し付けただろ」

「ま、そのおかげでちょっと休憩できるんじゃないか」

千鶴は椅子に座って伸びをした。しかし、その目の前に書類の山が置かれる。

「そんな暇があると思ったか？ 追加の仕事だ」

「はあ、鶯は真面目だなあ……」

「お前が不真面目すぎるだけだ」

と、外から何か突き刺さる音と共にどん、と振動が伝わってきた。「なんだ？ あれ」

「ああ、ちよつとしたサプライズさ」

第07章「名乗りの挨拶」

生徒会室から出た翼を待っていたのは、昨日の少女だった。
会った瞬間、翼は冷静に襲撃された。

「殺す気か！」

「違うわ」

……言い切りやがった。

少女が手にした刃は、翼の頬を掠めて壁に突き刺さっていた。

「この状況で、言い逃れができると思ってるのか！」

「ええ。ただし必要なのは言い逃れではなく、状況説明ね。私はあなたが本当に不死なのか確かめようとしたのよ。以上、状況説明終了」

「そんな乱暴な確かめ方があるか！」

「この前のように瞬時に回復はしないのね」

少女は勝手に翼の傷の観察を始めていた。

「あー、何でこう俺の周りには話の通じない人ばかりなんだ？」

「あなたも十分話を通していないから大丈夫よ。私は冷静に、合理的な話をしているのに、それを無視しているんだもの」

「あなたの勝手な理屈に付き合うつもりはない」

「随分とわがままね」

「あなたに言われたくない……と言いたいとこだが、このままじゃ堂々巡りだ。妥協しよう」

「そうやって延々と妥協する人生を生きて行くといいわ」

「いちいち揚げ足を取るな！」

「あなたがそうやって面白い反応をしてくれるから、ついやってしまつよ。あの会長がからかってしまうのも分かるわ」

「分からなくていい。いや、分からないでくれ、頼むから……」

……俺は昨日会った時に、この子を心配していたんじゃないかっただろうか。

昨日のあの子はどこに行った？ここは昨日とは違う時空なのか？

「さて、現実逃避は済んだかしら？」

「勝手に人の心を読むなど言っている！」

「そう。じゃあ、これからどうするのかしら？それは私には読めないわ」

「ふむ……って読んでたのかよ」

「表情をね。そこから表面的な感情や思考を推測していただけよ。

あなたは表に出やすいの」

「まあ……それよりこれからどうするか、だ」

「強引に話題を戻したわね。まあいいわ、どうするの？」

翼は一瞬だけ考えを巡らせたが、答えはすぐに出た。

「うん。ここでひとまず、話し合おうか」

「……えっ？」

一樹は帰り支度をしていると、妙に急いでいる小春に気付いた。

「小春。そんなに慌ててどうした？」

「ああ、緊急で仕事が入ってな」

「……仕事、というからには『情報屋』の依頼があったという事なのだろう。」

「そうか、まあ頑張れよ」

「ああ。まあ仕事だから、きつちりこなすだけなんだが……」

その時、小春が珍しく小さい溜息を吐いた。

「どうした？乗り気じゃないのか？」

「いや、なんか胡散臭いんだ」

「なんだそりゃ？何か根拠があるのか？」

小春は大げさに考えるように、ややわざとらしく額に手を当てた。

「このタイミングで緊急で仕事が入るのは、不自然だ」

「不自然？」

「もつと早く依頼してきてもいいってことだ。それに仕事の内容も、緊急で頼むようなものじゃなかった。どうもこちらに探りを入れるのが、狙いのような気がする」

「だが、お前の実力を図った上で、もつと大きい依頼を頼む気かもしれないだろ？」

「ああ、今回はこつちがそういう風に思ってくれるように、依頼が来てる気がするんだよ」

「思考を誘導されてるってことか？」

「この仕事をやってると、いろいろと疑り深くもなるんだ。その分、鼻も利くようになる」

小春はフツと小さく鼻を鳴らして答えた。その後、頭に掻きながら、一言付け加えた。

「まあ最終的にはそんな気がする、以外の明確な根拠はないがな」

……最終的な根拠は勘か……

「それだけで十分な根拠とは……」

だがその言葉の途中で、小春は今まで見たことない楽しそうな笑みを見せた。

「しかし、仮に罠だとして、それに飛び込んでいくのも面白いかもしれない」

その一言に一樹は大いに驚いた。

「さっきの言動といい、仕事といい、慎重な奴だと思ってたけど、意外と冒険家なのか？」

「ふん。予想外が一切無い人生なんて、面白くもない。それに、冒険家だからこそ情報を集めるって所もあるな」

「まだまだ僕も、お前のことを知らないんだな……」

「俺だってお前のことは全然知らないさ。俺たちが出会ってからどのくらいだと思ってる？」

そこで二人そろって息を吐き、そして微笑んだ。

「そうだな……なんだか昔からの、幼馴染のような気分で話してた

よ

「それは光栄だな。さて、そろそろ行かないとか……とりあえず、明日にはあの塔にいるお姫様の話でも教えてくれ」

「お前！なんでそのこと!?!」

慌てて問う一樹に対して、小春は素早く補足した。

「話してた内容までは知らない。ただ、お前たちが塔に居たって情報
報を掴んだんでな」

「そうか……」

「じゃ、また明日な」

「おう。仕事、頑張れよ」

黙って片手を上げると、小春は急ぎ足で教室から出て行った。

「さて、お名前は？」

「たぎたま 鷺崎 あすか 飛鳥」

「俺は鷹月 翼、よろしく」

「よろしく」

そう言って微笑む飛鳥だが、先ほどの会話で先輩 会長と印象
が被ってしまって、

……どことなく黒い笑みに見えるな。

「何か質問は？」

「それなら昨日の件について……」

「あ、それは待ってくれ」

そこで、翼は飛鳥の話を止めた。

「何？」

「ここには、いろんな能力者が居過ぎる。近くに誰も居なくても、
感覚だけを強化すれば盗み聞きも可能だ」

「つまり、場所を移したいってこと？」

「そうなんだが、先にこいつを何とかしたい」

そう言つて、翼は先ほど千鶴から預かった紙を見せた。

「ああ、その件なら私も依頼されたから、内容は把握しているわ」

「なら、時間の指定もある以上、先にこいつを片付けよう」

「そう。でも、そうしたらまた逃げるのかしら？」

「この状況で逃げるのは賢明じゃない。はっきり言つて、もう逃げ切れないからな」

その言葉に、飛鳥は翼を疑う……を通り越し、半ば呆れるような目で見ていた。

「あの時点では逃げ切れると思っていたの？」

……そうじゃなきゃ逃げないけどな。

俺はそんな何も考えてないように見えるのか。状況に合わせて判断はしているんだがな……

翼はふうとため息を吐くと話を続けた。

「たまたま出会っただけだと思つていたし、追われても俺の生活圏内にいなければ、どうにでもする手はあつたのさ。ただ、ちょっと近すぎた。逃げるより説明して、説得した方が早い」

「じゃあその説明とやら、楽しみにしておくわ」

あつさりと引き下がつたので、意外にこちらを信用してくれてくれるのだと翼は驚いた。

「ま、実を言つと俺も、君の能力が何なのかは気になってる」

「今ここで教えても、私は構わないわよ」

「そういうのは公平じゃない。俺は貸しを作るのは、出来る限り避けて生きていきたいんでね」

翼は、わざとらしくヒラヒラと手を振った。

「面倒な生き方ね」

飛鳥は完全に翼を呆れた目で見ていた。しかし、翼は一転して真剣な表情になる。

「誰だつてそれぞれの価値観があつて、それぞれ大事なものがあるんだ、面倒じゃない生き方なんてあるもんか」

……そんなこと、当たり前だよな。

翼は千鶴に言われたことを思い出し、今の自分の言葉に少し空しさを感じていた。

「勝手な屁理屈をこねていないで、さっさと行くわよ」

「はいはい」

あっさりと受け流された翼は、大人しく飛鳥に従った。

第07章「名乗りの挨拶」（後書き）

と、この辺で登場人物一覧を。

・鷹月 翼……死なない？少年で主人公。生徒会長ともいろいろ関わってるけど一般生徒。

・鷺崎 飛鳥……翼をいきなり戦闘に巻き込んだちょっと危ない子。

・高宮 千鶴……生徒会長。自信家で実力がある手におえない人。女

だけど女好き。

・白羽 鶯……副会長。仕事をさぼって騒いでばかりの会長に頭を悩ませる苦勞人。

・白羽 秋時……生徒会の一員。あんまり前に出ない裏方。

・雉本 一樹……弱い力しかない少年で、もう一人の主人公。

・塔の少女II アリス……謎の少女。塔で一樹と出会う。

・雲雀 小春……一樹の友人で情報屋。いろいろ調べて知っている。

・鷺津 水月……小春のパートナーで情報屋。人見知りが激しい。

何でこんな中途半端なところにな？と思ったなら、副題をもう一度読み返してください……というのはジョークとして、まあネタバレになっちゃうからですね。それでもこの時点でまだ水月さん出てないよ！というツツコミは野暮ですよ。

第08章「交差の予感」

「水月^{みつき}」

「なんでしよう、小春さん？」

「今回の仕事なんだが……お前だけに任せていいか？」

いつも『情報屋』としてパートナーをやっている水月としては、突然の仕事だった。二人で仕事をしないということも含めて、突然小春から伝えられ、少し驚いた。

……しかし、前からこういう事は何度かありましたし、別に問題はありません。

「小春さんは来ないんですか？」

だが、水月は聞き返してしまった。問題があったわけではない。ただ、いつもと様子の違う小春の事が何か心配だったのだ。

「あ、ああ。ちょっと別に調べる必要があるんでな」

……やはり変です。

こういう時ほど、小春は淡々と連絡だけをする。

……そもそも、小春さんがこちらに問いかけをすること自体、普通じゃありません。

道具でも使うように命令するだけなのが、いつもの仕事であるはずだ。

「小春さん。今回の仕事、何かあるんですか？」

その言葉が来るのを待っていたような、あるいは恐れていたような、どちらとも取れる表情をして、小春は息を吐いた。

「水月に隠し事は出来ないな」

小春は苦笑するが、水月は真剣な眼差しで答えた。

「つまらない隠し事なんて、やめてください。私には……小春さんしかいないんですから」

「そうだな。今回の仕事は、畏かも知れない。だが、それほど危険はないだろう。せいぜいこちらから何か探りにくる……という所か。

念のため、俺は仕事は終わるまで身を隠しておく」

「はい」

……小春さんは『情報屋』としての情報の全てを持っています。

小春が隠れるのは当然だ。その上で、水月は一人で仕事を達成しなければならぬ。

「もし、危険なことがあったとしても、俺はお前を信じている。が、無理はするな。お前が逃げれば、追える奴はいないだろう」

「では、行ってきます」

「ああ、無事に戻ってこい。それが最優先だ」

「はい、そう言ってもらえて、私は幸せです」

そう言い残すと、水月はその場から姿を消した。

「やれやれ、畏に飛び込むとか言っておいて、結局水月を飛び込ませるだけ……か」

小春は、自嘲の笑いを浮かべた。

翼は飛鳥と、千鶴に指示された場所に向かっていった。今回は『情報屋』に依頼をする人と実際に調査をする必要がある対象が、両者とも生徒会の協力者で、調査対象の方に向かう指示だ。

依頼した情報を得るためには調査対象への接触が不可欠なので、その場に居れば確実に『情報屋』に会えるだろう、という作戦である。

「しかし、直接会わなければ、得られない情報ってなんだ？」

「あら、ちゃんと把握してないの？」

「生憎と、さつき知らされたばかりなんでな」

横目で疑いの視線を向けられた翼は、慌てて釈明した。

「今回は、発火能力者に低温の炎が使えるか、という調査よ」

「なんだそれ？」

「名目としては、調理用途に使用出来るかの調査」
「なるほど」

……って調査が成功したら、先輩はどうするつもりなんだ？

翼は内心で思いつつ、そんな話をしているうちに指定されていた校舎裏に辿り着いた。調査対象の子を見つけると、見える位置で待機し、飛鳥が小声で話の続きを始めた。

「能力の上限の調査、となると流石に無理があるけど、下限となれば話は別。しかも、人前では滅多に披露しないから、情報を手に入れるには直接聞くしかないわ」

「なんで上限だと駄目なんだ？」

「例えば、射程上限を調べてもらって、その外から攻撃を加えたらどうなるかしら？」

「あー……」

「後は……今回は温度だから、最大温度で溶かせるものより高い温度でなければ溶かせない金属を用意して、それで武装すればあの人は……」

「分かった。俺が悪かった」

意地の悪い説明を続けようとする飛鳥を、翼は止めた。

「いえいえ。分かって頂ければ結構よ」

翼が降参したのを見て、飛鳥はにこりと微笑む。その様子を見て、翼はため息を吐いた。

……ますます先輩に似ている　いや、あの人はもっと夕子が悪いか。

その時だった。それは予想とは違う形で、唐突にやって来た。

「え……！？」

果たして、二人のどちらが声を上げたのか。それが分からなくなるほどの事が起きていた。

突然、空中から人間が現れたのだ。

第09章「跳躍の交差点」

飛鳥は、突然空中から人間が現れたことに混乱した。何らかの能力だということは分かる。

「……………」
だが、唐突な出現よりさらに奇妙なその姿に、その場の全員が動けなくなっていた。無言のまま降りてきたのは、狐面をして顔を隠した人だった。

……………何を考えているの……………？

素顔さえわからないが、体格から女であることは分かる。

「あ……………え？」

当然のことながら、調査対象の少女も混乱していた。

……………この少女が『情報屋』なの？

飛鳥は何とか思考を巡らせ、隣の翼を見る。翼も混乱しているようだ。

「……………」

しかし、狐面の少女は無言のまま対象の少女に、何かを見せた。どうやら、携帯端末のようだが、このまま一言もしゃべらず仕事を達成する気らしい。

そこで飛鳥は翼と一度、視線を合わせて頷いた。そのまま、言葉も無く一步を踏み出す。だが、先行する飛鳥が一步目を踏んだ瞬間だった。

「……………」

狐面の少女は、再びその場から姿を消した。しかし、同時に現れてもいた。

瞬間移動　一瞬にして空間を跳躍したのだ。そして彼女の体は今、飛鳥の目の前にあった。

「な……………っ！」

……………でも、二度目となれば驚いてばかりじゃないわ……………！

しかし、直後に飛んできた蹴りに対しては、上手い対処など出来るはずもなかった。

「っ！」

それでも形だけであつたが、防御は間に合つた。飛鳥は何とか顔を上げる。

しかし、狐面の少女は動きを止めてはいなかつた。流れるような動作で小さな十字架の飾りを宙に放ると、両刃の長剣に変わる。

「く……っ！」

一方の飛鳥はまだ体勢を立て直せていなかった。そして、眼前に刃が突きつけられる。

「っ！」

その瞬間、時が止まるように静まりかえつた中で、飛鳥の息を飲む音だけが響いた。

……殺される。

脳裏に死がちらついで、恐怖が体を支配しようとした。すると、狐面の少女は急に刃を引いてしまった。

「はあっ……」

……警告のつもり、だつた？

そのまま、狐面の少女は背を向けて行こうとしていた。だが……

……ふざけるんじゃないわ！

それは怒りだつた。自分でも制御できないほどの怒りが、全身に駆け巡つた。

飛鳥は瞬時に両手に刃を呼び出すと、斬りかかつていた。

「ああああッ！」

「………！」

一瞬の交錯で攻撃がぶつかり合い、見えない視線と見つめる殺気が交差した。そして、狐面の少女が再び長剣を構え、互いの呼吸が二度目の交錯へと向かう。

「おおおおおッ！」

飛鳥は自分が叫んでいることも、なぜ戦っているかすらもはや理

解していなかった。ただ、鬪争に支配され尽くしていた。

「はあああッ！」

気迫の声と共に飛鳥が突撃するが、狐面の少女はもうその場にいる。跳躍によって回避されてしまう。

……まだよッ！

だが、研ぎ澄まされた感覚は一瞬で跳躍した相手を捉えていた。側面から襲いくる剣戟に即座に対応すると、一つの剣と二つの刃が空中で竜巻のようにぶつかり合った。

「あああッ！」

「……！」

しかし、一瞬の激突で数え切れぬほどの刃を交し合ったにも関わらず、互いに掠めるほどの斬撃しか入れられていない。

両者とも、一度弾かれるように一歩下がったものの、すぐに再び刃を交え合う。

その中で、飛鳥は徐々に理性を取り戻していた。

……これは、決定打に欠けるわね……。

「はああああッ！！！」

「……！！！」

連続跳躍で四方から攻撃する狐面の少女に対し、飛鳥は踏みとどまったまま斬り合う。乱れるように斬撃の嵐が飛び交い、互いに傷つけあう踊りが続いていた。

しかし、その踊りもやがて終焉へと至った。飛鳥の大振りと、狐面の少女の長剣が激突し、互いに弾き合って、一度大きく後ろへと後退した。

「はッ……はッ……はッ……」

「ッ……」

……少し……最初は熱くなり過ぎたわ。

でもやるわね。ここまで相手が出来ることとは、もっと戦えるはずよ。

狐面の少女は顔を隠しているが、互いに視線がぶつかるように威

押し合った。

「はあッ！」

「……ッ！」

……来るわね。

と、狐面の少女が消えた。跳躍だ、と思う間もなく斬撃が横から飛んでくるが、刃で受ける。もう一本の刃で反撃をするが、今度は背中側に回られる。しかし、初撃を受けた刃をそのまま背中に回す。そうして再び二人の斬撃の踊りが始まった。

……でも、いつまでも付き合う気はないわ。

覚悟を決めると、体が反応した。

今度は自分から一度、後ろへと下がる。そして刃を構えなおすと、突撃に合わせて振り下ろした。すると、腕の動き 刃に合わせて、赤い斬撃が乱れ飛ぶ。

だが、相手の反応も見事だった。ここまでの戦いからこちらの一撃を感じ取り、直前で跳躍すると数歩分後ろへと退いていた。しかし、避けられることも予想はしていた。

……ここからが、勝負よッ！

赤い斬撃が暴れ狂うように続けざまに飛んでいく。相手は連続跳躍で必死に躲しているが、完全に一方的な攻撃となっていた。左右の斬撃を繰り返すように振り下ろす。

「おおおおおおッ！！！」

……このまま、押し切るわッ！！

飛鳥はいつまでこの攻撃が維持できるのかはつきりと分からなかったが、今こそが勝機であり、これを逃せば次はないと感じていた。短調な繰り返しではなく、左右どちらが動くか読ませないようにしつつ、全力で振り続ける。

「……ッ！！！」

狐面の少女が、かすかに声を漏らす。暴風のような赤い斬撃は、一瞬にして辺りのものを切り刻んだ。しかし、それすらも跳躍によってギリギリで避けられ、避けきれぬところを長剣で防がれる。あ

と一歩ながら、その一歩がとどかない。

「ッ　　ああッ　　はああああッ！」

続く異能のぶつかり合い。連続する攻撃の中、再び飛鳥が刃を振りかぶる。しかし、その時だった。突然、目の前から相手の姿が消えた。

キーン！

……え？

ごく僅かな間隙を突いた反撃。飛鳥は手元から刃が弾かれたことが、一瞬理解出来なかった。

……飛び越された！？

飛鳥は振り向いて、事実を認識した。相手は振りかぶった瞬間にこちらの後ろへと跳躍し、刃を打ち上げたのだ。空中を回転する刃が飛鳥の目に映る。

「……」

そして、再びの跳躍によって相手が前方に現れる。飛鳥は、残る一本の刃で防御することも忘れたかのように、茫然と立っていた。だが、直後に彼女は横から突き飛ばされた。

「くっ……」

割り込んできたのは、翼だった。手にしていたのは鉄パイプ。その辺りに転がっていた古い机や椅子の脚だろう。相手が振りかぶるより先に突撃をかけていた。

長剣の刃に鉄パイプがぶつかる。だが、その程度で怯ませたところで、状況が打開するとも思えなかった。しかし、

「どきなさい！」

突然の飛鳥の声に、翼は半歩ほど下がった。と、そこに刃が落ちてきて突き刺さった。翼と狐面の少女は、刃に仕切られるようにして互いが見えなくなったことと、何より突然の落下物によって固まってしまうていた。

……さっきのお返しが、まだだったわ。

だが、飛鳥は違った。その一瞬で距離を詰め、狐面の少女の眼前

に刃を突きつけた。

「これで、お相子よ」

「……」

すると、狐面の少女は後ろへ退いた。さらに、素早く武器をしま
う。

「どうやら、向こうはもうやる気はないみたいだな」

「……ええ」

……始まりもふざけていたけれど、結末も酷いものね。

飛鳥はその場にあつた刃もう一本の刃を引き抜くと両方とも仕舞
った。

「あれ？手元にあつたのを投げたんじゃなかったのか？」

「違うわ。あれは打ち上げられた方を、あそこに落としたの」

狐面の少女は先ほどの携帯端末を操作して、誰かに連絡を取って
いるようだった。

「そのまま帰るつもりかしら」

「いいのか？」

「まあこれ以上はお互い面倒だし、いいんじゃない？どうせ追えな
いでしょ？」

「……なんかもう、すっかり関心が無くなったな」

と、狐面の少女はその場から消えてしまった。

「これだもの、ね。騒いでもしかたないわ……それより」

と、そこで急に飛鳥が翼に詰め寄った。

「さつきは何故、あんなところで加勢したの？」

「え？」

飛鳥がいつもより強い声を出す。

「というより、なぜ最初から加勢しなかったの？」

普段からはつきりと通る声が強くなっているので、すごい威圧感
を放っていた。

「何をそんな大声を……怒ってるのか？」

「怒ってるわ。ええ、怒っているわよ！戦えない人間が、戦場に出

るんじゃないわ!」

気が付けば、飛鳥は翼の胸倉を掴んでいた。

「戦えないって、別に俺は……」

「覚悟がないの? 同じでしょう? あなたを庇って死ぬ人もいるかもしれないのに……」

「何も知らないのに勝手な事を言うな!」

「ええ。あなたの事情なんて知らないわ。でも、さっきみたいなことをしているなら、部屋に閉じこもっているべきよ。そうでないなら戦う覚悟をしなさい」

飛鳥の手が、ゆっくりと翼の胸倉から離れた。

「な……」

「そうでないなら。あなたはまた死んで、あなたの周りの人も死ぬわ」

そこまで言うと、飛鳥は振り返って歩き出していた。

第10章「夜の武闘会」

水月は離れた場所に跳躍し、引き続き小春と連絡を取っていた。

『思わぬ邪魔が入ったので、仕事は失敗してしまいました……』

『問題ない。俺の方で処理しておいた。それより早く戻れ。もう暗くなる』

『分かりました』

……私は、小春さんの期待通りに動けたのでしょうか？

水月はそう思いつつも、一刻も早く戻らねばと思い直した。しかし……

……体が 動かない？

腕や足どころか、指の一本まで。それはまるで見えない何かに押さえつけられるようだった。

「ふっふっふっ……捕まえたぞ！ 『情報屋』！」

「千鶴。それは悪役の台詞だ」

「いいじゃないか悪役！ 世界を守るために我々は悪にもなるっ！」

「では言い直してやる それは小物の台詞だ」

「それは困るな。私は力と合わせて常に大物でなくては」

「お前の大物っぷりにはちょっと関心するよ」

……なんででしょう。あの妙に息の合っているけれど、こっちが入りにくい空気……

人見知りで小春以外の人は話も出来ない自分としては、あまり関わりたくないと思う。

「おい。相手の子が嫌そうな顔しているぞ、早く話を進めろ」

「うむ。まあ単刀直入に言おう。君は 人質だ」

……えっ？

その瞬間、水月の表情が怯えたものになると同時に、跳躍してその場からいなくなった。

「おいおい。単刀直入すぎるから逃げちゃったぞ」

「大丈夫だ、鶇。捕捉している」

しばらく二人が歩いていくと、物陰で動けなくなっている水月がいた。

「ふっふっふっ……」

「そこからはやらなくていい」

……やはり息が合っていますね。

「とまあ、こんな風にキミが逃げられる範囲など、私が余裕で捕捉できる。逃げるのは無駄だ」

「ということで、ちよつと生徒会に協力してほしい。まあ乱暴な手であったのは認めるが、君たちが強引な手を使ってまで尻尾を掴ませなかったからこそ、こうした強硬手段に踏み切らざるをえなくなつたことは理解してほしい」

「……」

……この人たちのいうことも、一理あります。

変な人たちなので本当は小春に相談したいが、話は道理になつているから大丈夫だろう。

……それに 小春さん以外の世界も、もっと私は知るべきです。

「返事は？」

「はい」

「うむ、とても可愛くていい」

「お前、それでいいのか？」

「ああ、可愛い、美しい、素晴らしいじゃないか！」

鶇はいつものように呆れた顔をしていた。

……大丈夫ですよ？

「さて、ここからは危ないので下がってたまえ」

「……？」

水月は首をかしげた。

「一応、安全のために拘束は解いてある。身の危険を感じたら逃げることに。それまでは」

そこまで言うと、フツと笑みを浮かべた千鶴が一步前に出た。

「私の後ろで丸くなってでもいるといい」

水月の前に、千鶴と鶇が出る。すでに暗くなった校舎前から、校庭までに暗闇が発生していた。どうやら襲撃者が、身を隠すために何らかの力を使って不可視にしているようだ。

鶇はスツと千鶴の前に出ると共に、戦いのために自分の中でのスイツチを静かに切り替えた。

……ここからはいつもの襲撃者との戦いという訳だ。ただ……

「さて、夜の舞踏会という訳だが、招待状はお持ちかな？」

千鶴はいつも通り大げさに手を振り、暗闇に潜む影に質問していた。

「持っているわけないだろ、招かれざる客なんだから」

……そう、招かれざる客だが……いつものお遊びじゃない。たぶんな。

「なるほど。そんなジョークの利いた返しをするなんて、鶇もなかなかノッているね？」

「これから戦いだからな、私も少しはノリもするさ」

「ふむ、鶇にノッてもらえるとは、私は戦いにさえ嫉妬した方がいいのかな？」

「安心しろ、一番は常にお前だ」

「おや」

……そう、相手が何であっても、千鶴を守り抜くだけだ。

そこまで言うと、鶇は猛スピードで暗闇に突撃した。

……私の力 『傲慢狩りの合成獣』^{グリフォン}！

暗闇に潜んでいたのはまず女が一人だった。

……それもメイド服 ……！？

「十和と申します。以後、お見知りおきを」

直後、辺りを包み込むように大爆発が起こった。

千鶴は鵜が突撃した後も、その場から一步も動いていなかった。

「あの……」

水月が後ろから、小さい声で心配そうに話しかけてくる。

「ああ、問題はないよ、私の力は知ってるだろう？」

水月はコクリと頷いた。

と、そこに銃弾が飛んでくる。が千鶴に当たる直前に壁に阻まれるように止まった。

「ほらね」

水月は実際に銃弾が止まるのを見て驚いていた。それを見た千鶴は……

……驚いた表情も可愛いな。

と思った。この世の美しいもの、可愛いものは私に愛でられるべきなのだ。最近定義が広がった気がしたが、些細なことだと千鶴は思った。

……なぜなら私は大物なのだから。

そして振り返って前を向いた。そこには敵がいるからだ。

……先ほど可愛い少女との会話を阻んだという、許しがたい敵が。

そして暗闇から、影がやってくる。銃を持った影。それは、

「私は九恩と申します。では、よろしく願います」

……メイドだった。

銃声が、その場に響いた。

第11章「王者の力」

鶇は爆風に乗って空を飛んでいた。瞬時の判断で上に逃げたのは正解だった。

『傲慢狩りの合成獣^{グリフォン}』にはさまざまな身体強化能力があるが、その最大の特徴というか、見た目がもっとも変わるのは間違いなくこれだろうと思う。

翼が生えるのだ。

そもそもグリフォンとは、鷲の上半身とライオンの下半身を持つ伝説の生き物だ。

……相変わらず自分の力ながら、とんでもない組み合わせだな。

鳥の王・獣の王の合体とは、かなり反則的だ。鶇は昔、この力が嫌いだった。見た目の変化が気持ち悪く、力は強すぎて扱えず居場所がない。そんな鶇はよく適当に飛び回っていた。

そして

……千鶴に会った。

最初は変な奴だと思った。何よりも会って第一声が、

「おや、天使が降りて来るとは。今日の私はツイているな」

……だったもんな。

でも、気が付けば副会長にされ、隣にいるのが当たり前になっていて……

そこで鶇は、下を見た。どんな力かは分からないが、あのメイドと十和が傷一つなくそこに立っていた。しかし、鶇は動揺することも、臆することもなく、攻撃に移る。

「そう。私は今、こうして全力で力を使える場がある！」

鶇は叫びに合わせて急降下と共に拳を叩き込んだ。加速した拳は、強烈な威力を持つ。

……私は、千鶴を守るために力を使えるのが嬉しい。

と、拳が直撃したはずの十和がナイフを抜き放ち、再びこちらに

襲い掛かってくる。

……死にはしなくても、気絶くらいはしているはずだが。

その攻撃をあつさりと捌いた鵜は、『傲慢狩りの合成獣』の力を再び発動する。基本的に翼以外に見た目が変化するものはない。今度は爪を展開したが、現実には爪が出るわけではなく、爪があるかのように切り裂く力の付与が行われた。言わば『幻影の爪』だ。

「はぁッ！」

鋭利な爪が相手の体に爪痕を刻む。だが、その傷をも無視して十和は突撃を継続する。

……それは予想済みだ。

遠慮なく二撃目の蹴りを叩き込む。『傲慢狩りの合成獣』の力が付与されている以上、常人の蹴りではない。蹴られた十和は一瞬で壁に叩きつけられた。

「まいったな、壁を壊してしまっ……」

壁の一部にひびが入ったのを見て鵜は呟いたが、それは途中で止まった。

……傷が回復している！？

それも驚異的なスピードだった。十和はまるで時間を逆戻しにするように、爪痕も服も元通りに治ってしまった。おそらく、蹴りのダメージからもすぐに回復するだろう。

……こいつは厄介だな。

鵜はすぐに判断を下した。羽ばたいて飛び上がり、倒れている十和を上空から強襲する。

だが、急降下に合わせた拳は予想外にも避けられた。相手も勘だったのだろうが、動けるようになったと同時に横に転がったのだ。正確な狙いが逆に仇となった。

「……っ！」

どちらが息をのんだのか。あるいはお互いだっただのかもしれない。一瞬の緊張の中で、十和の攻撃手段は拳銃だった。しかし銃弾が放たれる前に、それは爪によってスライスされていた。

「なっ……！？」

今度は十和の声だ。鶇は戸惑う必要などない。冷静に相手の体の中央を、まとめた爪の一撃によって刺し貫く。そして、十和の体を掴むと翼を広げて飛び立った。

「終わりだ」

最終的に、鶇は十和を木の枝に放った。そのまま、百舌のはやにえのように突き刺さる。

「これで、とりあえずは動けないだろう」

……誰かに見つからないといいんだがな。

そう思いながら、鶇はひとまず千鶴の元へと向かった。

銃声が鳴り響き、千鶴は頭を撃ち抜かれた ように見えた。しかし銃弾は、届くことなく地面へと落ちた。

「全く、殺す気が」

「そのつもりですが」

九恩と名乗ったメイドが答える。

「メイド相手だろうと、私は殺されるつもりはないよ」

……フツ、私は美しいもの、可愛いものでなければ、別に揺らがないのだ。

「そう、キミのようなメイド、所詮出来損ないだよ。美しくない」

……決まった。

だが、千鶴は気が付いた。後ろから来る疑惑の視線に。その視線の元は、水月だった。

「あれ？私ってひよっとして信用ない？」

後ろでコクコクと水月が頷いている。彼女がこんなオーバーリアクションをするのは珍しい。

「それでも私は、好みの子は選んでいるんだが……」

……何より 私の本命は決まっている！

メイドが流れるように射撃してくるのを、千鶴は全て叩き落とすた。

「何なのですか、その力は」

続けて、九恩の手から拳銃が吹き飛ぶ。

「おや、私の力も知らずに私を殺そうとする輩がいたとはね」

そして、無手となった九恩自身が打撃され、いきなり吹き飛ばされた。

「とんだ無策、無謀、無知だと笑ってあげよう！」

さらに空中にいる九恩に、連続で打撃が入る。しかし、千鶴はその知覚で感じていた。

……ダメージが回復している……！！

千鶴は確かめるために、メイドを地面へと叩きつけた。

だが、異常なスピードで回復が始まる。ダメージが回復すること自体、正常ではないのだが。

……医療の神の加護を受けるとか、そういうものではあるまい。

「ふむ……」

中にはそういうものもいる。が、ここまで反則的な回復となると、……後輩に一人いるか。ま、あれは例外だな。

千鶴はさらなる追撃として、地面に叩きつけた九恩の手足の骨を押し潰すように粉碎した。

しかし、相手はすぐに再生を始める。

……これでは物理的に殺すことは出来ないか。

「死なない力とは……面白い」

……本当に面白い。しかしそうでなければ私を相手に戦いにもならないだろう。

「私にぶつけるには最適な人形だ」

そこで千鶴はフツと笑みを作った。

……一体誰が、これをぶつけて来たのか。やはり『統治機関』か。

「そう、この私 『サイコキネシス念動力』にぶつけるには、ね」

第12章「戯れの夜」

千鶴は笑みを崩さぬまま、倒れている九恩を見つめた。

……手足は砕いたはずだが、再生すればまたこちらに襲い掛かってくる、か。

おまけに、九恩は手の近くに拳銃が落ちていることに気が付いているようだった。

「手の再生を優先。銃を回収後、再攻撃に移ります」

呟き、言葉通りに実行してきた。手が動くようになると同時に銃を拾い上げ、射撃する。足の再生も進めているのが、千鶴には知覚できていた。

「無駄だよ、人形くん」

と、千鶴は銃弾を弾いた。そして思う、

……人形にメイド服か、なかなかいい趣味だ。

そう、人形は着飾らせて愛でるもの。そういう意味では

「うむ、いい選択だな。その服は！」

言葉に合わせて力を飛ばす。が、足の再生がギリギリ間に合った九恩は、かろうじて避けた。

「先ほどは出来損ないと言ったね。訂正しよう」

だが、千鶴は余裕を崩さない。放たれる弾丸も悉く叩き落とす。

だが、九恩は千鶴の斜め後方へと爆弾を放る。そして正面に拳銃を構えた。

「キミは最高の 人形だ」

だが、爆発はごく小さな火球へと抑え込まれた。千鶴の力だ。同じタイミングで撃たれた銃弾も、全て千鶴へ届くことはなかった。

「残念だったね。私が一度に使える力は一方だけではないのだよ」

……相手に何をしても無駄だ、残念だ、効かないと、私の力は否定ばかりだな。

千鶴は微かに笑みを浮かべた。そして、そのまま九恩を捉える。

その動きが完全に止まった。

「さて、人形遊びといこう。私は容赦ないよ？」

……しかし、この使い方は否定ではない。

「そうだとも。私は自分の可能性まで否定はしない！」

と、九恩が直立姿勢になった。千鶴によつて先ほどの水月同様、全身の動きを操られている。今は喋ること以外出来ない状態だ。

「な……」

「まず、人形の姿勢を正さなくてはね」

次に九恩の服に隠されていた、拳銃とナイフが取り出される。

……ふむ、付属物は拳銃とナイフか。

「まずはナイフだな」

九恩にナイフを飛ばし、右手に掴ませて肘を曲げると、左手を伸ばしてポーズを付ける。

「何をしているのですか!？」

「言つただらう、人形遊びだよ」

と、九恩の体が宙に浮き、ポーズが変わる。

「写真にでも撮っておけると、良かったのだがな」

今度は拳銃も掴ませ、着地させるとポーズを続けて変えた。

……なかなか楽しませてくれるな、この人形くんは。

「おい、なにやってんだ。千鶴様」

後ろから、声と共に呆れる視線を感じた。

「秋時か」

「アンタは相変わらずだな、千鶴様」

「どうした秋時。活躍の場がないから出て来たのか？」

……ふむ。秋時が出しゃばってくるとは珍しい。

千鶴は遊ぶのを止めた。九恩を壁面へ叩きつけ、転がっていた鉄パイプで串刺しにする。

「俺の出番がないのは、アンタが前線に居るからだ。大将なんだから後ろに下がってる」

そう言うと、秋時は千鶴を睨みつけた。が、

「全く、秋時も面白いやつだな」

千鶴は、笑って返した。

「何が面白い」

「私を睨みながら私の心配をする。様付けで呼んでみたと思ったら、アンタと呼んでみる」

そこで、秋時は小さく舌打ちした。

「だからアンタの前に出るのは嫌なんだよ。いつもこれだ」

「秋時がいつも安定しないからだろう」

…… からかい甲斐のあるやつだ。

「目つきと口が悪いのは生まれつきだ。言われなくても分かってる」
「生まれつきなのは目つきだけだろう。それに、姉の口は悪くないが？」

…… そう、鶯はいつも私に、厳しくも優しい言葉をかけてくれる。
「姉貴の口が悪くないって言うなら、アンタは深刻な病気だな」

「 ああ、確かに。恋の病、というやつだ」

「そいつは手遅れだ」

秋時は呆れ顔で千鶴に言うと、自分の影に隠れていた人を見せた。

「で、ここに居る姉貴はどうする？」

「別にどうもしないよ。そこに居ることは気付いていた」

秋時は再び小さく舌打ちした。一方で、隠れていた鶯はいたって冷静だった。

…… 今までの話を聞いていたはずだが、流石は鶯だな。

「で、どうした？ わざわざ来たってことは、何か言うことがあったんだろう？」

「ああ。なんだか敵が厄介だな。別に強くもないんだが、すぐ再生する」

「おや、そちらもか」

「そちらも？」

「ああ、そこに……」

と、千鶴がそう言って振り向いた時だった。突然、足元で黒い光

が輝き
爆発した。

鶯は、突然起きた爆発に少し驚いた。しかし、千鶴がそばにいたので心配は一切していなかった。実際、爆発の煙が晴れて聞こえてきたのはいつもの千鶴の声だった。

「全く、この私に爆発などで挑もうとは……少し低俗ではないか？」
……本当にいつも通りだな。

一応、相手にとつては奇襲だったはずだが。

「しかし、目くらましに爆発とは。なんでも爆発させればいい、とか思ってる奴だな」

「相手としては、それなりにまともな攻撃なつもりだったんだと思うぞ」

「くだらん。つもりで攻撃が通じなければ、反撃であの世行きになるだけだ」

……それはもつともなんだが、千鶴は規格外だからなあ。

「まあ、人形共が戦闘に対して役に立たず、それなのに認識遮断の暗闇が発生している時点で、誰かもう一人いるのは容易に予想が出来た。しかしそれが爆破魔とはな……」

「勝手に相手の考えまでを決めてやるなよ」

……確かに、この戦闘でのいきなり爆破は二度目のような気がするけどな。

「ふむ、では特別に名乗りの時間をやる。やあやあ我こそは……と出てくるがいい。その間は攻撃しないでやる」

「いつの時代だよ」

と、暗闇が揺らぎ、その中から三つの影が姿を現した。

……本当に出てきちゃうのかよ。

鶉の心の声など届くはずもなく、現れた三人は順に名乗っていった。

「こんばんは。紹介の機会をありがとう。俺の名は真八。一つよろしく」

「真八様に続きましてこんばんは。私は九恩。先ほどの方も、これからの方も、どうぞよろしくお願いします」

「九恩に続きましてこんばんは。私は十和。私たちは既に知っていた通り、死なぬ存在です。どうぞ覚悟の上、お楽しみを」

……あれ？十和って倒したよな？まあ死にはしなかったけど。

「というか、九恩と言ったか？キミは先ほど鉄パイプで壁に串刺しにしておいたはずだが？」

……ああ、千鶴がツツコんだ。

「ふん、その二人 正確には九恩の方を助けるために、さっきの爆発を使ったのさ」

丁寧にも真八が答える。だが、

「そうか。なら次は目くらましではなく、もっと捻った手を考えてくれたまえ」

千鶴がバツサリと切り捨てた。

「くっ……」

……まあ、千鶴が相手じゃなあ。

「あのなあ、俺だって……」

「真八様」

「くっ……分かったよ」

何かを言いかけた真八は、九恩というメイドに黙らせられることになってしまった。

……なんだか気まずい流れだな。

「しかしさっきの相手が死なないからって、鉄パイプで串刺しとは。千鶴も結構エグい事をするな」

……とっさに話題を変えたが、この話題でよかったのか!?

「では、鶉はどうしたのかね」

……先ほどの疑問が激しい後悔になったが、しかたないな。

「……百舌のはやにえのように、木の枝に」

「発想は同じだね」

「アンタら、自分たちの会話内容が、頭のおかしいもんだって分かってるか？」

「この会話がおかしいのなら、普段の会話など可笑しくて涙が出るね」

「そういう、よく分からん言葉遊びはしなくていい」

……一応、ツッコんだ。

正直、普段から何を言っているか分かりづらい千鶴にこれ以上遊ばれると、本格的に何を言っているのか分からなくなる。

「柄にもなく秋時が争いに明け暮れる我々を、部外者面で指摘してきたので言っただけだよ。私とて平穩は愛おしい、と。そして、お前も同類なのを忘れるな、とね」

「アンタは相変わらず上から目線の上に、話が回りくどくて分かりづらい」

……そうだなあ。千鶴も、もっと素直に話せばいいのに。

「別に秋時に理解は求めてないさ」

……って、私に分かればいいってことか？いや、それは流石に自意識過剰だろうか……

「で、肝心の俺たちが置いてきぼりなのも困るんだが？」

真八が、しびれを切らして口を挟んできた。

「すまないね、別に忘れてはいない。きちんと応えるさ」

千鶴はフボンと笑っていた。相手の緊張と対照的になるその表情だけで、場を支配する。

「生徒会長の高宮 千鶴だ。能力は公言しているが、サイコキネシス『念動力』だ」
鶴もそれに合わせた。こちらもいつも通り、冷静なままだ。

……いつだったか、私の態度を冷たい炎とか千鶴に言われたことがあったな。

頭は冷静に冷え切っていて氷の様なのに、心は炎の様。確かに千

鶴の言うとおりでと思う。

「副会長の白羽 鷓だ」

「おや、そちらの人の能力は聞けないのかな？」

真八がつつかかってくる。が、

…… 止めておけばいいものを。

「副会長は能力を公言していない。聞きたいのなら、そちらも明かしてもらうことになるが？」

すばやく千鶴が対応し、真八はすぐに、

「なら別にいい。続けてくれ」

と引き下がるしかなかった。

「会計の白羽 秋時だ」

「「えっ」「」

千鶴と鷓が声を上げる。

「なんだその反応」

二人の対応に訝しんでいるような視線を向ける秋時に対し、鷓ははつきりと言った。

「お前、会計だったのか」

…… 全く知らなかったのは、反省すべきなのかな。

正直なところ、姉だからこそ仕事に私情を挟むまいとしていたし、確かにあいつの役職など気にしたことはなかった。それに、この学園の選挙など形骸化している。

「会計だが、他の雑用もやってる。忙しいからな。姉貴達と同じだ」

「あ、ああ。そうだな」

しかし、秋時は千鶴と鷓が知らなかったことに別に動揺していないようだった。

…… そんなことはどうでもいい、ということか。

我が弟ながら、よく分からん奴だと鷓は思った。同時に大物かな、とも。

「さて、自己紹介はこんな所かい？」

再び話から置いてきぼりになりそうだった真八は、仕切り直すよ

うに一歩前に出た。

「そうだな。さて、どうする？このまま帰るといふなら見逃してやることも出来るが？」

対する千鶴はいつものように余裕だ。

「そういう訳にはいかないんでね。十和！九恩！」

真八は二人を呼ぶと、後ろへと下がる。そこには校庭が広がっていた。

そして、再び暗闇が展開される。

「さあ、ゲームスタートだ！」

第13章「白羽の戦端」

鶇は目の前に暗闇が広がるのを見て、一つの判断をした。

……ここは私が戦うべきだ。

「千鶴、敵は三、こちらも三だ」

「数ではそうだな」

「いつものフォーメーションで行こう。私が前に出る。秋時、援護してくれ」

「了解だ、姉さん」

「待て。私に後ろに下がれと？」

……ま、素直に聞くわけがないか。

「ハッキリ言おう。相手も流石に馬鹿じゃない。何か切り札を隠してるはずだ」

「そんなもの、私の力の敵ではない」

千鶴はやはり簡単に引き下がらないようだった。しかし、鶇は目を見てはつきりと言った。

「だからこそ、私が前に出る」

「……なるほど」

……分かってくれたか。

「ん？いいのかよ？」

「仕方ない、私たちの間のやり取りが理解できない秋時に、特別に説明してやろう」

「相変わらずム力つく言い方だな。早くしろ」

「私の力は距離など問題にならないから、鶇はそれを信頼して罠に飛び込むということだ」

「いつものフォーメーションじゃねえか」

秋時のツツコみに、鶇が口を挟んだ。

「私は初めにそう言っただろう」

「あー、確かに姉さんはそう言ったが。いや今のツツコみはそうじ

やなくてな……」

「ゴタゴタ言っていないでさっさと行くぞ」

「はいはい」

鶉の言葉に、秋時は不満そうにしながらも従う。

「まずは、敵の頭数を減らす」

「相手は死なないんじゃないのか？」

「ああ、だから」

鶉はニヤリと笑った。目付きはすでに獲物を狩るものとなったので、凄絶な笑みだ。

「ここは力押しだ」

言うが早いか、鶉は既に羽ばたいていた。前方では、十和と九恩が身構えている。

……そうだ。今の私には、容赦も慈悲もない。

「そのメイド共、叩き潰すぞ」
宣言すると、鶉は舞い上がる。

「フツ。鶉はいつになくノリノリだな！」

後方で騒ぐ千鶴に対し、秋時が冷静にツッコむ。

「いや、ノリノリなのは確かだが　ちょっとは止めるよ。千鶴様」

「断る。私は見ていて楽しいのでね！」

……そりゃ、アンタはそうだろうけどさ。

「相変わらず、そういうところは駄目だなアンタは。まあアンタに期待した俺が馬鹿だった」

そう言つと、秋時はどこからか銃を取り出す。それは拳銃だった。

『アルテミス』。狩猟を司る女神の名前であり、銃としても加護が付いてるものだ。それと、アルテミスは月の女神でもある。

「姉貴の援護は俺がする」

「フツ、お前の事も信頼しているのだぞ。馬鹿だがな」

「馬鹿にしたいのか、誉めたいのかどっちだ」

……俺に安定しないといったが、千鶴様もな。ま、千鶴様はわざとやってるんだろうが。

「自分で馬鹿だと言ったから、それに合わせてやったただけだ」

「そうかい、そりやどうも。千鶴様」

銃を構えながら応答する秋時に、千鶴が突然ムツとした表情で言った。

「その千鶴様と言う呼び方、様付けの癖にどうも言い方が投げ遣りではないか？」

……意外だな。千鶴様がそんなことを気にするとはな。

だからこそ、秋時は正直に答えた。

「そうか？これでも敬意を持って呼んでるんだがな」

……これは本心だ。でなければ、千鶴様の無茶な要求に毎回応えることもないし、こうして内心まで様づけで呼んだりはいしない。

「む？そうか」

「そうだ。アンタは姉貴の居場所なんだからな」

そこまで言くと、秋時は顔を背けた。

「そのくらいで照れているようでは、鶯の足元にも及ばんな」

「うるさい。アンタは予定通り後ろに下がってる」

そこまで早口で言くと、秋時は射撃をしながら前に行行った。

第14章「月光の射手」

鶇は舞上がり、宣言通りに相手を叩き潰そうとした。しかし、黒い光がそれを邪魔した。

「まさか、爆発……ってそれはもう飽きた！」

羽ばたくと一気に連続で起きる爆発を回避した。だが、その先に居た相手は、今まで見ていない武器を持っていた。

「黒い……剣と槍っ!？」

十和が剣を、九恩が槍を、それぞれ装備していた。

……真つ黒な武器なんて、嫌な予感しかしないな……!

鶇は、両側から武器が来るのに合わせ、半身をずらすように宙返りすることでそれを躲す。

「ッ！」

左右から来た剣と槍が交差する。その中心を背面跳びの選手のように、すり抜けて行った。

宙返りが完了しかかったところで、武器が交差するところを空中で蹴って距離をとる。

……相手は空中で制動が取れない。悪いがここは

鶇は左に大きく回り込み、素早く相手の後ろ側を強襲した。

「私の、独壇場だッ！」

反応が遅れた相手に爪を叩き込むと、しかし鶇はすぐに羽ばたいた。言いようもない殺気を感じたからだ。

「オオオッ！」

直後、相手の体を貫いて剣が顔を出す。そして、続けて爆発が起きる。

……死なない体を利用した、味方を囮にする戦術か

鶇はまだ、戦場を冷静に分析していた。とりあえず、あの剣は攻撃すると爆発するらしい。だが、あのメイド達の武器ではない。あの二人はナイフと銃しか持っていなかったはずだ。

と、そこで鶇の考えを邪魔するように連続爆発が再び展開した。

「ええい、鬱陶しい……」

……所詮目くらましか。

だが、鬱陶しいと思うなら、目的は果たしているのだろう。この爆発も小規模な物ばかりで、とてもこちらを倒す気など感じられない。

「ハアツ！」

鶇は気合いと共に翼を展開すると、一気に爆風を吹き飛ばし、敵の状況を確認した。九恩は先程の攻撃のダメージか、後方で動けなくなっていた。そこに、正面から十和が斬りかかってくる。だが、相手の斬撃をギリギリまで引き付け、翼を一度打ち鳴らして後ろに下がると、鶇はそれをあっさり避けた。そして再び羽ばたいて前進に転じる。

「くだらん。人形ごときが空中戦では百年経とうが、この私には勝てないと知れ！」

そして十和に爪痕を刻むと、蹴りをお見舞いした。方向は調整してあったので、そのまま九恩にも当たるはずだ。これで二人共片付いた。と、そこで気が付く。

……九恩が動けなかったのは、秋時の援護か。

飛んでいく十和を見送る際に、九恩が撃ち抜かれるのが見えた。

先程の一撃だけでは足りなかったのではと思っていた鶇だが、納得した。

「ようやく本命か……」

鶇は広がる暗闇を見つめた。しかし、

……さっきから爆発ばかりだしな。本当に爆破魔だったな。

そう思うと、少し気分が重くなった。

秋時は拳銃『アルテミス』を構えながら思っていた。

……姉さんは無茶しすぎじゃないだろうか。

最近、姉は仕事ばかりだ。俺もフォローはしているが、それでも忙しい。それに戦闘も増えている。

「全く、昔から無理しすぎなんだよな」

秋時は『魔法の弾丸』^{マジック・バレット}を使いながら考える。これは射撃・投擲武器の軌道を自由に操る力であり。つまりは支援用の能力だ。『アルテミス』も能力の一部であり、いつでも呼び出せる。

……しかしそれでも、姉さんの助けになってるのかどうか

「またくだらん考えをしているな、秋時」

と、千鶴がやって来た。

「何だ、アンタか」

「千鶴様と敬えない辺りに、いきなり凶星を指されたお前の心境が見え隠れしているぞ」

……アンタはいきなり出てきてウザりたいな。本当に。

「どうせまた姉の心配でもしていたのだろう？」

「っ！」

「お前が姉を大事にしているなど、誰にでも分かる。まして、私は鶯が好きなのだぞ？」

……全く、この人は。

秋時は思わず笑ってしまう。笑うしかないほど、千鶴はいつも通り自信满满だった。

「分かったよ。分かったから、アンタは前に出てくんなくて言うてるだろ、千鶴様」

「前に出ているのではないさ。前線が押し上げられたから、それに合わせて後ろも前進しただけだ。置いていかれないようにね」

「屁理屈をこねるな。退屈だったただけだろ」

「そうとも言っ」

自信満々に笑う千鶴に、秋時のツッコみが打撃で入った。

第15章「暗闇の罟」

鶉は空を駆け抜けていく。その眼下には暗闇があった。どうやらこちらの知覚を完全に遮断しているようだ。あの千鶴でさえ中が分からないのだ。

……ここは、飛び込むしかないか。

覚悟を決めると、降下した。視界を闇が黒く染めていく。

……これは

鶉は突然、視覚がおかしくなるのを感じた。とつさに下がることも出来ず、出来たのはその場に着地することだけだった。

「なんだ、これは!?!」

闇に包まれた鶉は混乱していた。右、左、上、下……全ての方向が認識できないのだ。

頭では、後ろに下がればこの闇から出られると理解している。しかし、後ろという方向が認識できないために、一步も動けずにいた。

……落ち着け。後ろに下がるだけならば……

まず、目を閉じた。今、視覚で認識できるものは混乱を招くだけだ。そのまま、摺り足で後ろに下がって行く。ゆっくりとした速度ではあったが、確実に脱出に近づいてはいた。

……このまま行けば……!

だが、当然それを邪魔する者がいた。

……殺気!?!

どの方向から来るか分からない攻撃に備えた。時間がゆっくり流れるような気がする。

「そこかッ!」

鶉の防御は、何とか間に合った。攻撃は爆発だったのは言わずもがなだが、吹き飛ばされたことで、完全に方向が分からなくなっていた。

「くっ……」

どこに動けばいいのかわからない。それは恐怖だ。言い様のない恐怖が体を支配した。目は開いているのだが、そこから入ってくる情報は脳で処理できないものになっている。

……マズいな

このままでは立っていることさえ出来なくなる。上下さえ視覚では認識出来ない状態で、なお立っていられるのは、かるうじて足の裏に地面の感覚があるからだ。

次の攻撃が来れば危ないのは十分分かっている。早くここから脱出したいところだが……

……ん？

その時だった。唐突に、何かを通り過ぎる音が聞こえた。

「音……？」

そして鶯はこの闇の中でも、自分の聴覚がまだ使えることに気が付いた。普段通りとはいかないが、微かに音は聞こえる。完全に使えないのは視覚だけのようだ。

……だからさっきの爆発を躲せたのか。

そしてこの音はおそらく

「秋時の弾丸か！」

そう結論付け、音のする方へと自分の耳を頼りに飛んだ。

途中で弾丸が一発、体を掠めた。が、それで自分の推測が間違いでなかったことを知ると、一気に羽ばたく。そして 鶯は光の元へと脱出した。

秋時は鶯を信じて射撃を続けていたが、その姿が見えたので少し安心した。

「一時はどうなるかと思ったな」

鶯が暗闇に入った後は、その存在まで知覚出来なくなっていたが

……そのせいで能力まで使えなくなつたときは、流石に焦つた。
いや、あの時のことを言うなら、使えはするが、役に立たなくなつたと言う方が正しい。たとえ弾道を操れる『魔法の弾丸』とて、
的が知覚できなければ無用の長物だ。

……最終的に射撃を続けることで、姉さんを外へと誘導した訳だが。

しかし、目の前の状況はあまり安心出来るものではなくなつていた。

「ここで奇襲か！」

思わず声を荒げる。暗闇から十和と九恩が鶯に襲いかかろうとしていた。

「くっ！」

言葉にしない形で銃の名前を呼ぶ。と、手元の拳銃『アルテミス』が素早く虚空に消え、別の銃が現れた。短機関銃『ルナ』だ。

……いくぞ！

引き金を引くと同時に大量の弾がばら撒かれる。しかし、『魔法の弾丸』^{マジック・バレット}が発動した。

「っ！」

たとえ全ての弾丸の軌道を操れるとしても、連射しているならば全てを当てるのは困難だ。故に、大きく外れた弾丸のみを操るのだが、それでも尋常ではない集中が必要となる。

「……！」

それでも、集中しただけの価値はあつた。集められた弾丸は一瞬で十和を撃ち抜く。

……次！

左右に敵がいる以上、中央の鶯は上手くすり抜けなければならぬ、弾を当てないように全て逸らしつつ、しかし連射を持続させた。

……おおおおお！

最後の一瞬に極限の集中を叩き込み、九恩を蜂の巣にした。

「はあ……はあ……」

一瞬に全力を注いだ分、秋時は息を切らせて倒れる寸前のような状態だった。

「これで、つまらん奇襲は防いだぞ！」

しかし、力の限り叫んだ。と、その声に答えるものがあった。

「どうかな」

その一声と共に、次なる罠が展開したのだった。

第16章「王者の決着」

鶇は視界が開けて、自分の視覚が戻ってくるのを感じた。少しづつ視覚を回復させ、状況を確認した。すると、十和と九恩が倒れていくのが分かった。

「また秋時に助けられたか」

……普段表に出たがらないが、やはり肝心な時には頼りになるな。そこに秋時の叫びが来る。だが、それに答える声と動きがあった。

「……これは!？」

後方の暗闇が蠢く。その動きに反応し、鶇は空へと逃れた。と、一気に闇が広がり始めた。

「まずいな……!」

一気に加速し、秋時と千鶴の元に向かう。

……というか、なんで千鶴はあんな所にいるんだ？

そして、手を伸ばす。

「千鶴! 秋時!」

声が届いたのか、動きが見えたのか。どちらにせよ、二人も手を伸ばした。

……もう少し。

だが、その時二人の表情が変わった。

「十和と九恩か!」

しかし、千鶴は『念動力』サイコキネシスを、秋時は伸ばしていない手で『アルテミス』を使った。

後ろでメイド達が倒れる音が聞こえる。鶇は手を精一杯伸ばし、千鶴達の手を取ろうとした。

……なんとか間に合ったか

その時だった。すでに見飽きていた光景が、鶇に訪れた予想外であつた。それは、

「爆発 ……!？」

鵜は二人の手を取り落す。あと少しで、すぐに取れる位置まで来ていたのに、加速していたからこそ二人と距離が離れていく。闇が、二人を飲み込もうとする。

「っ！」

声にならない叫びをあげる。もはや無我夢中になって、もう間に合わないだろうと分かっているのに、それでも引き返そうとした。

……それで、何になる？

自分の問いかけにすら答えられず、ただ二人を助けようと、翼を広げた。とその時、

「あれは 『情報屋』！？」

鵜は思わず声を上げた。その影 『情報屋』 は距離を超越し、闇がギリギリに迫る二人の間に降り立つ。そして二人を掴むと距離を、空間を跳躍した。

……間に、合ったのか……

鵜はしばらくの間、空中で放心していた。その間に、千鶴達は瞬間移動を繰り返して、屋上に辿り着いた。

「どうやら、何とかなつたみたいだな……」

その様子を見届けると、鵜はフツと息を吐いた。そして、影の届かない空へと離脱した。

水月は屋上で鵜が降りて来るのを待っていた。隣には自分が助けた千鶴と秋時がいる。

あの時は、とっさに動いてしまったのだが

……間に合って、よかったです。

しかし、慌てていた水月とは対照的に、千鶴は余裕の表情を崩していなかった。

「あの……」

「ん？どうかしたのかね？」

千鶴がこちらを覗きこんでくる。その瞳には、こちらを気遣う優しさが見えた。

水月はふーっと息を吐いて自分を落ち着かせると、ゆっくりと答えた。

「か、会長さんはわ、私が助けにきて、お、驚いたりしてない、んですか？」

「偉い立場の者は、そうそう慌てるものではない。下に居るものが不安になるからね」

水月は、そういうものなのですか、と納得しかけた。が、すぐに首を振って考え直す。

「ふ、副会長さんとか、す、すごい慌ててました、よ？」

「ははは。鵜はしょうがないなあ……なんてな」

そこで千鶴は、笑顔から少し少し目を細めた。

「まあ、鵜の反応が普通だ。私はね、あまり感情が動かないのだから強すぎる」

「え……？」

「人には過ぎた力を持つ宿命 当然だね。私には驚きも哀しみも怒りも、僅かしか残されていない。しかし、喜びと楽しみも失いかけたのだがね、なんとか取り戻せた」

「そ、そんな……」

……そんなの、悲しすぎる。

だが、千鶴はフツと笑った。優しい微笑みだった。

「キミは優しいね。『情報屋』とは思えん。まあ、半分は冗談さ」

「え、あれ？」

……騙された？でも半分って？

「まあ、実際に私の感情がどこまで本当かなんて、私にも分からん。ただ、喜びと楽しみを取り戻してくれた人がいたのは本当だ。だからこの二つは、自信を持って本物だと言おう」

そう言うと、千鶴は本当に嬉しそうに笑った。

「千鶴！」

水月の後ろから、鶯が降りて来る。だが、千鶴は先ほどと同じ笑みのままだった。

「千鶴、無事だったんだな」

「ああ。その『情報屋』さんのおかげだな。鶯も無事そうでは何よりだ」

その笑みを見て、水月は思った。

「……この人が、会長さんの喜びなんですね。」

そして、千鶴は屋上の縁へと歩いていく。その眼下には校庭が広がっていた。校庭全体を包みかねないほど、暗闇が広がった校庭が。「さあ、仕上げといこうか」

千鶴は宣戦布告をする。水月はその後ろ姿を見ていた。

「さて、くだらない小手先で私に挑んだ愚かさを、今から悔やむがいい」

「ふん、捉えられない敵が倒せるものか」

「その考えが愚かだな。知覚できない場所に逃げればいいなど、小物の考えだ」

そう言つと千鶴は片手をおおげさに振る。その能力によって、大気がビリビリと震えだした。

「……え？な、何？」

「たとえ、知覚出来ない場所があるとしても」

千鶴が言葉を紡ぐたびに、力が空間に収束していく。目に見えない力が、そこにあるのが誰にでも分かるようになっていく。もちろん、水月にも。

「……な、何ですか？こ、れは」

「そう。知覚できない場所を全て潰してしまえば、意味は無いのだと」

これが、最強最悪と恐れられた生徒会長の力、サイコキネシス『念動力』。その
本当の力。

「……凄い。」

「覚悟はいいかね？」

その後、空に集まっていた力が、一気に校庭に降りそそいだ。

第17章「結末の交差道」

秋時も、いつもながら凄まじいその力を感じていた。

……相変わらず、凄いとしか言いようがないな。

自分たちの生徒会長が強いということは知っていても、その本当の力はあまり目の当たりにしない。だからこそ、この力には圧倒される。

……それに、怖いな。

それはこの力が、ではない。これ程の力を持つことが、だ。あの会長はどれだけのものを背負っているのか、と秋時は思う。

……だからこそ、信頼も尊敬もするんだがな。

「終わったか」

と、鵜が呟いた。それとほぼ同時に、千鶴の攻撃は終わる。そして、暗闇が晴れていく。

「うわ……」

誰がそう呟いたのか、とにかく校庭は惨状だった。しかし……

「相手の死体がない……？」

鵜が疑問を口にする。その場で皆が、同じ疑問を持っていた。

「十和か九恩が再生して、真八の死体を回収したってことか？それにしても再生が早すぎる」

秋時の意見に、答えを出したのは千鶴だった。

「いや、逃げられた」

「逃げられた!？」

「ああ、おそらく知覚不能領域を広げたのは、地下に逃げるためだ。地下ならば私の攻撃は届かん。地下も探れなくはないが、そちらに意識を集中しなくてはならんからな。してやられた」

「今から追っても無理なのか？」

「いや、相手が引くのなら深追いは禁物だよ。鵜」

鵜は、大人しく千鶴の言葉に従った。次の行動として、校庭の処

理のために連絡を始める。

「さて、招かれざる客は去ったし、少し話をしようか」

と、千鶴が水月の方に振り返る。

「ふむ、『情報屋』では呼びづらいな。名前を覚えてもらってもいいかな？」

「……み、水月。鷺津 水月です」

水月の震える声に、千鶴がうむ、と頷く。

「水月くん。断言しておこう、私たちは君と争う気はない」

「いや、この惨状の前では脅しじゃないのか？それは」

「そうならないために話をしようとしているのだが、分かって貰えるかね？」

水月はコクコクと頷く。大人しそうでこいつもなかなか大物だな、と秋時は思う。

「さて。我々が水月くんを追っていたのは、今回の戦闘にも関係がある」

「……ど、どういうことですか？」

「先ほど見た通りだ。学園に危険な奴らが来ているのでね。『情報屋』をやっているとなると、狙われる可能性があった。なので、一刻も早く接触する必要があったのだよ」

「……き、危険な人たちが、き、来ているなら『統治機関』に相談すれば……」

……いきなりその核心を突いてくるか。

「キミはなかなか賢いね。そこまで考えてくれるのは嬉しいが、これ以上の話は明日にしよう。今日はもう遅い」

「……分かりました」

すると、そこで鷓がこちらに振り返る。連絡が終わったようだ。

「千鶴。処理の方、手続きは済んだ。が、明日までにどうかするのは無理だ」

「流石に調子に乗り過ぎたか……まあいい。反省は後です」

「……あ、あの」

歩き出そうとして、秋時は水月に声をかけられた。

「どうした？」

秋時は振り返って水月を見た。すると……

「……え、いや、あの」

……どうしてそんなに怖がる。

と、自分が睨んでいるような顔になっていることに気が付いた。

「ああ、悪いな。俺の目つきが悪いのはいつもの事で、別に怒っちゃいない。落ち着いて話せ」

「……は、はい。ひ、一つ教えてください。秋時さんはふ、複数の銃を使っていましたよね？」

「ああ、あれか」

「……と、特殊な武器は、の、能力に依存しているから、多くは持てないはずですけど……」

「ああ、こいつが『アルテミス』。二つ目のこつちが『ルナ』だ」
実際に二つの銃を手元に出して見せる。

「……め、女神の名前ですか。つ、月の女神……ど、同一視ですか」

「俺の台詞を取らないでくれるか」

「う、ごめんなさいっ！」

「いや、怒っちゃいけない。そんな大げさに謝るな。まあ、そういうことだ。アルテミスとルナは月の女神として同じものとして扱われた。だから、この二丁の銃は両方加護を受けている」

……調子狂うな。

しかし、頭の回転と知識は本物だな。分析もできるように仕込まれているのか。

「……な、納得しました。ありがとうございます」

「いや、気が済んだならなによりだ」

秋時はそう言って頭を掻きながらも、銃を虚空にしまった。

「さて、話は終わったかね」

「ああ。まあ、助けてもらった礼って所だ」

秋時は肩をすくめて少しおどけてみせた。

「一応聞いておくが、そんな簡単に話してしまっているのかな？」

千鶴の真剣な顔での追及に、秋時も真面目に答える。

「こいつらは情報の価値を知っている。言いふらせば価値はなくなる。口の堅さに関しては信用できると踏んでるが、甘いと思うか？」

「ふむ。私は別に、秋時の考えに口は出さんよ。聞いてみただけだ」

「……つくづくアンタは下の人間に厳しいな。千鶴様。」

「では送っていこう。流石にもう危険はないとは思うがね」

「……はい」

そして、皆が歩き出す。だが、そこで千鶴が立ち止って空を仰いだ。

「どうした？千鶴？」

鶉は忘れものか？と聞いたが、千鶴はいや、と答え、

「あの人形どもが余りに弱かったことを思い出してね。おそらく、あの不死性というものを確保するにはあのくらいの弱体化が必要だったのだろうが……」

「そうか？あれでも十分強かったと思うが。ちゃんと不死だっただろ？」

「……結局、倒すことは出来なかったしな。」

「ふむ。だからこそ一人の後輩を思い出すのだよ」

その言葉に、鶉も同じ人物を思いついたようだった。

「あの例外中の例外か」

「そう、翼くんの事をね」

そして、千鶴は楽しそうにニヤリと笑った。

「彼は覚悟を決められただろうか」

第18章「弁明の時間」

時間は少し遡って夕方。翼は、先を急ぐ飛鳥を追いかけていた。

「そんなに急いでいなくても……」

「聞こえてるわよ。急いでるんじゃないよ、怒っているの。あなたの曖昧な態度にね」

またそれか、と翼は思ったが、口には出さないのでおいた。
やがて、飛鳥は大きな門の前で足を止めた。

……ここに何か用があるのか？

と、飛鳥はいきなり門をくぐると、中に入ってしまった。

「ええっ！」

「何？」

「勝手に入ったら怒られるだろう……？」

翼は辺りを見回した。しかし、何も起こらない。

「怒られるわけないわ」

何故か飛鳥は自信満々だった。

「勝手な侵入者がいたら、警報が鳴るわ。そもそも侵入者はこの門をくぐれないわよ」

「そう……で、なんでそんな詳しいんだ？」

「だってここ、私の家だもの」

「えええええっ！」

「そんなに驚くことないじゃない」

いつも戦闘ばかりしてる奴が、こんな武家屋敷の様なかい屋敷に住んでいれば、誰でも驚くだろうと翼は思った。

「そんなにすごいものかしら。まあ、当主のおばあ様の趣味よ」

「そうか……」

そう言われても門だけでも見上げるような屋敷では、流石にすごいとしか言いようがない。しかも暗くなっているので分からないが、実は明るくても屋敷の広さが把握できない気がする。

「まあいいわ。なんだか納得いかないけど、とりあえず先に適当な部屋に案内してもらっていて。私は荷物を置いてくるわ」

「いや、ちよつと待ってくれ」

「まだ何か？」

少し不機嫌そうな顔で振り返る飛鳥に、翼は尋ねた。

「君の家で大丈夫なのか？人に聞かれたくない話だつて言っただろっ？」

「ああ、それなら心配ないわ」

そう答え、飛鳥はクスツと軽く笑う。

「むしろ、ここより安全な場所なんて、この都市には存在しないくらいだから」

「どういう意味だ？」

「いづれ分かるわ。あなたもここに立てているのだから、認められているのでしようし」

そんな意味深なことを言って、飛鳥は先に入って行ってしまった。

……しかし、やっぱりすごい所だな。

翼は、門をくぐるときに思わず笑ってしまった。

飛鳥は翼の居る部屋の戸を開けた。と、翼が何かを隠そうとしているのが見えた。

「何をしているの？」

「あ、いや。なんでもないんだ。本当に」

……この慌てぶり、何かあるわね。

「隠しても無駄よ。私はあなたが死なないことは知っているの。いざとなれば殺してでも確かめるわ。諦めなさい」

「確かめられるために死ぬって、対価が間違つてないか！？あと、人を勝手に不死身にするな！」

「なら、私はあなたが殺せるの？」

その問いに対して、翼は少し目を伏せた。

「その答えは分からない、だ。俺が死んだとき必ず生き返るなんて、誰も保証してくれない」

「あらそう。私は死んだときに生き返らないって確実に保証されているわ。確かにその方が安心かもしれないわね。随分とぶつ飛んだ安心だけでも」

はつきりと言いかえしながらも、飛鳥は内心で苦笑していた。

……本当に、私はなんの話をしているのかしら。

だが、次にきた翼からの言葉は、意外と言えるものであり、また予想通りでもあった。

「だから、俺は自分から死ぬような真似をしたいわけじゃない」

「それが戦いを避ける理由？随分と利己的ね」

……正直、気に入らないけれど、まだ許せる理由ね。

「いや、それもあるが……それが全てじゃない。ちゃんと話をする」
ふむ、と飛鳥は頷くと、改めて尋ねる。

「で、その後ろに隠しているのは何なのか、いい加減教えて貰えるかしら」

「あ、これは……」

と、翼の後ろからそれが出てきた。半透明になった。少女。

「あー……」

翼は、困った顔をしたまま、固まっていた。だが、飛鳥はすぐに反応した。

「京花お姉様！」

飛鳥はその半透明の少女に抱きつこうとした。しかし、それは空を切った。

「え？」

「……つと」

そして、翼に冷静に抱き留められた。しかし、飛鳥はそれに動じる様子もなく話を続ける。

「どづいつこと?」

「何が?というかそれはこっちの台詞じゃないのか?」

「どうして死んだはずの京花お姉様が、ここに居るのかって聞いているよ。それもまるで、幽霊みたいな姿で!」

……さあ、きっちり説明してもらおうわ!

しかし、翼は何事も無いかのよう^に答えた。

「ああ、どうやら京花は俺に憑いているらしい」
「は?」

流石の飛鳥もそこで固まった。

……憑いてる、憑いてるって?

やっぱりお姉様は死んでいる。それは間違いない。死人は生き返らない。目の前の人間は死人にならないだけだ。と、そこまで考えて飛鳥は尋ねることにした。

「あなたとお姉様はどんな関係で、今どどういう状態になっているのか詳しく説明しなさい」

「慌てるな、言われなくてもちゃんとする」

翼は片手を顔の前に差し出して、今にも掴みかからんとする飛鳥を止めた。

「俺と京花が出会ったのは、小さい頃だ」

「それはそうよ。お姉様は幼少の頃に亡くなっているもの」

……そうよ。

あの時、まだ小さかった日に起きた喪失で、この世の意味を全て失った。気がしたのだ。

「いちいちツッコむな。まあそれで、要は子供の頃からの友達だったって訳だ」

「思い切り省いたわね」

飛鳥はやや不機嫌な顔になってみせたが、翼は完全に無視した。

「何言っても文句が来るようだから、もう反応しないぞ。で、京花の能力は覚えてるな?」

「ええ。『強化能力者』^{ブースター}。他者の能力を強化できるといって、非常に

稀な能力だったわ」

…… ああ、あんなに賢く、優しく、そして心強かったお姉様。

飛鳥は少し天井を仰ぎ、微かな感傷に浸る。だが、すぐに現実の話へと意識を戻した。

「そして、京花自身も凄まじい才能の持ち主だった。京花の手にかければ、誰でもこの都市を支配する能力者になれるだろうと言われるほどに」

「それゆえに、もし元からこの都市を支配する実力のある 例えば今の生徒会長なんかと、お姉様が組んだら、世界が滅びるといふ予測がなされたのね」

…… 世界が滅びるといふ、予測くらいで。

「結果として、京花は殺された。世界を守るためにな」

「誰が殺したのかは不明 。ふざけた話だわ」

…… 本当に、ふざけた話。

飛鳥は、フツと息を吐いた。翼も、一度息を吐いてから、言葉を続けた。

「だが、その京花殺害の現場にもう一人、人間がいたのはほとんど知られていない」

…… え？

それは飛鳥にとって、予想外の事実だった。

「目撃者がいたの！？でも、そんなの消されるはずじゃ 」

「俺だ。だから俺は、一度消されている」

慌てる飛鳥の言葉に被せる様に、翼が話を続けた。そして、身を乗り出しかけていた飛鳥は、力の抜けたようにへたり込んだ。

「納得したわ。死なない人間なんて例外って訳ね」

「子供だったから、相手も確認なんてしていなかったしな」

…… 本当に、とんでもない例外だわ。

「そう、で。なんでお姉様はあなたに憑いているの？」

「それはよく分かん。最後に一緒に居たからじゃないだろうか」

「いい加減だけど、その方が納得できるわ。想ってる人なら、私の

所に来てくれるはずだもの」

「本気で言っ……いや、なんでもない。そういう事で、霊みたいな京花がたまに出てくる」

一瞬飛鳥に睨まれ、翼はすぐに言葉を訂正した。

……たまにということは、四六時中ではないのね。

と、漂っている京花と目が合った。優しく微笑んでいる顔は記憶にある京花そのものだ。飛鳥は軽く笑みを返し、翼との会話に意識を戻す。

「それで、結局あなたはお姉様を殺した犯人を知っているの？」

「いや、その時の記憶は曖昧になっているんだ。京花が殺されたことがショックだったのか、それとも犯人の能力なのか。実を言うと、京花のこと自体、最近になるまで思い出せなかった」

……思い出せなかった？

「興味深い話ね」

「おや、罵らないんだな」

「罵ってほしいならそうするわ。でも今は犯人の手掛かりの方が重要。それに、犯人を見つけたら罵るぐらいじゃすまないことをするから、別にあなたを罵る必要性を感じないわ」

……そう、ついに見つけた手がかりが目の前にあるのよ。

「何をする気だよ。話を戻すが、結局俺が京花を思い出したのは、霊の京花を見たからだっただ」

「実際にお姉様を見るまで……それじゃあ手詰まりかしら」

飛鳥はわざとらしく肩をすくめてみせる。だが、翼はしばらく考えこんだ後に答えた。

「……あとは、実際に犯人に会うことがあれば思い出すんじゃないかと思う」

……それが答えね。

確かに言いづらい事だ。相手はお姉様を殺した。並みの相手ではないだろう、と飛鳥も思う。

「手がかりはあるの？」

「世界の平和のために殺されたんだ。おそらく犯人は『統治機関』に居る」

……随分はつきりと言いつ切るわね。

これが自分の身の振り方に悩んでいる人の言動なのか、と飛鳥は思ってしまう。相変わらず変な人だ。その結論に至るには、いろいろ調べる事もあっただろうに。

「この都市の管理機関が、随分と胡散臭い事までやっていると考えているのね」

「中で戦争やってるような監獄の看守が、まともな奴だと思つのか？」

……以前言つた事の仕返しかしら？

そう思うと、最初に会つた時のことが思い出されて、少し笑いそうになつた。

「いいえ。私も犯人はあそこ以外にはいないとは思つけれど、規模が大きすぎるわ」

「そうだな。『統治機関』直属の暗殺部隊がいるつてのは昔から都市伝説であるが」

「何？『統治機関』だから都市伝説つて、それは笑えないジョークかしら？」

……本当に、笑えないジョークだったらよかったのに。

「いや、真面目な話なんだがな」

「まあ、実は私もその所属なのよね」

「え？」

翼が信じられないというような表情をしている。

……そんな人間がいるなんて、初めて聞いたのね。

「正確には、残党だわ。私の居た部署は数か月前に消滅……いえ、壊滅したの」

「どういふ事だ？」

翼はまだ疑いの表情をしていた。本当のことだと思つていないよ
うだ。

「私は学園生であると同時に、逸脱能力者警戒連盟、通称『逸能連』の所属でもあったのよ」

「それは……」

「つまり、私は極端な目的を持ってしまった能力者を裁く権利を持つて行動をしていたの。あなたと初めて会った時の戦闘はそういうこと」

だが、翼は疑うことを止めていた。だが、少し考えた後、意外な言葉を言った。

「それって、京花を殺した奴らと同じ……」

「違うわ」

しかし、はつきりと、飛鳥は言い放った。

「言ったでしょう、私は『極端な目的を持ってしまった能力者』と。つまり、頭がおかしくなってしまうた連中を相手にしているだけよ。それに私は裁く。殺すんじゃないで、捕まえるの」

「それって、上手くいつてるのか？」

「ええ。この前の奴もちゃんと捕まえたのよ？お姉様だって、ちゃんと話し合っていれば、殺されずに済んでいたはずよ」

……あんなに頭が良くて、争いなんて好まない人だったんですもの。

飛鳥はふと、京花の優しい笑顔を思い出していた。と、目の前にまた京花が漂って来ていた。

「ちよっといきなり別の話で悪いんだけど、今のお姉様は特に意志はないの？」

「う……それは分からない。会話が出来ないからな」

……役立たずね。

こう、アイコンタクトとかで何とかならないかと思っただが、京花が漂ってしまってなかなかこちらと目が合わなかった。と、翼が話を再開したので、後で試すことにした。

「で、なんの話をしていたんだっけ。そう、結局のところ、そんな仕事についてるのは……」

「ええ。お姉様の無念を晴らすため。それから、能力者殺しを担当している人がいるという噂を探って、なんとかお姉様を殺した犯人を捜していたのだけど、無理だったわ」

「で、部署が壊滅したとか言っただけでなかったか？」

「……そうね。」

「数か月前にね。クーデターがあったのよ。何に不満があったのか、どうやっていろんな人を説得したのかは分からないわ。話した通り、私の部署は比較的穏健派だったのだけど、今度はそうはいかない、急進派とでも言えば良いのかしら？そういう人たちが一番上になった」

「……どうして、あんなことになったのかしら。」

「自分のやってきた事は無駄だったのだろうか。京花を失ったのが人生最大の喪失なら、あの日は人生で二番目の喪失だろう。」

「それで、どうなったんだ？」

「邪魔者を全て排除するようになったわ。内でも外でもね。私の部署も邪魔者扱いされて、危うく殺されるところだったわ。おかげで今の『統治機関』は滅茶苦茶よ」

「……私はなんでこんな、外向けの事実だけ説明できるのかしらね。本当の体感した事実は、こんなものじゃない。一緒に仕事を頑張ってきた仲間の多くが、あっさりと命を奪われた。言い様のない理不尽に怒っている暇さえ与えてもらえず、生き延びることで必死だったのだ。気付けば全てが終わって、生き残りはわずかだった。」

「それで、先輩が大変だと言っただけか……」

「生徒会長、ね。あの人はおそらくこの都市で最も警戒されてるでしょう。彼女の『念動力』サイコキネシスは強力過ぎるわ。お姉様と同じように、相手は殺しに来るわ」

「まあ、先輩ならあんまり心配はいらぬ。簡単には殺せないからな」

「そう……ね。ただ、いくら強力な能力でも、過信はしない方がいいわ」

……正直、お姉様が殺されるなんて、私は考えてもいなかったわ。京花の能力は自身には何も与えない。しかし、ある程度の能力者から離れなければ、殺されることはないのだ。だが、それでも相手が本気で殺しに来るなら、巻き添えを出すことになる。それは千鶴も同様だ。本気で戦えば、周りを大きく傷つける。

「あの人は自分の能力の弱点くらい把握はしているさ。それに、強力な護衛も居るしな。能力といえば、君の能力は一体何なんだ？」と、その翼のいきなりの問いに対し、飛鳥も問い返した。

「それならば、私はあなたの能力の秘密をまだ聞いていないのだけれど」

「む、どっちから話す？」

「面倒だから、私から話すわ。でもその前に……」

そこで、飛鳥は言葉を切ると腰を上げ、振り返った。

「その前に？」

「喉が渴いたわ。少し休憩しましょう」

第19章「明日願う翼」

翼は飛鳥によって人が呼ばれ、部屋にお茶が届けられるのを見ていた。

「今のは？」

「この屋敷のお手伝いさん、というところかしら。流石にいろいろと手伝ってもらわないと、この屋敷もやっていられないのよ」

……なんとも感覚の違う話だ。

翼はそう思いつつも、お茶をすする。飛鳥ものを潤しているよ
うだった。

「さて、私の能力の話だったわね……」

「ああ」

と、そこで飛鳥は少し俯くように視線を下げた。

「どうかしたのか？」

「いいえ、なんでもないわ」

飛鳥は答えると、まるで決意をするように、翼へと真っ直ぐに視線を向けた。

「私の能力は『吸血主』っていの」

「吸血……主？」

……なんだ？

聞いたこともない単語に一瞬戸惑う。しかし、考えるより続きを聞くことにした。

「吸血の衝動に従って暴れる鬼ではなく、自ら望んで血を吸って従えるものよ。血を吸う鬼ではなく、血を吸う主。吸血鬼の先に居るものよ。吸血の種族という意味もあるわ」

「しかし、伝承とか何もないだろう？名前から能力が想像できないんだが？」

……珍しいタイプだな。

伝承があるというのは、それだけ昔からあったということであり、

強い能力者は多くが代々受け継いでいるからだ。もつとも、吸血鬼から変化したのかも知れないのだが……

「そうね。実際に見せた方が早いわね　ああ、これでいいわ」

飛鳥は翼の顔に手を伸ばした。そして、唇間傷を付けた所に手を近づける。すると、空中に血の玉が浮かんだ。

「何だこれ!？」

「これが私の能力『血液操作』よ。ただし、体内に流れているものは操作できないの」

そう言うと、その血の玉を口に含んでしまう。

「ああ、本当に美味しいわ　納得いかないけど」

「それは褒めたいのか、貶したいのか、はつきりしてくれ」

……　なんだかだんだん付いていけなくなる気がするな……

と、翼がふうと息を吐いたのに対して、飛鳥がはつきりと言った。

「私の吸血には、一種の運命判断があるの」

「え?」

「鷺崎の能力は名に縛られる、というものがあるの」

驚いていたところに加えられたその言葉に、翼は一瞬固まってしまった。

……　能力が縛られる?

「どういう事だ?」

「鷺崎の一族は、能力の決定の仕方が他の人と違うの。なんでも、名前によって能力が左右されるとか。能力によって名前が勝手に決まるとか……　詳しいことは私も知らないわ」

……　そんなの全く聞いたことがないぞ?

混乱しながらも、とにかく考えを巡らせた。しかし吸血鬼からの変化である、という予想が外れたぐらいしか理解できなかった。

とりあえず落ち着きを取り戻すために、翼はお茶を一口飲み、それから話を続けた。

「それで、そんな厄介な能力が生まれたのか?」

「厄介と思うかは考え次第ね」

「しかし、名に縛られる　か。飛鳥の苗字が鷺崎だって聞いた時、珍しいとは思ったが、京花と能力が全然違うから、姉妹だとは思わなかった。京花も珍しい能力だったしな」

……こんなに違う力で姉妹、か。

通常の人の能力の継承は、いわゆる血液型のようなもの、と言われている。また、性別が能力の継承に影響を及ぼすとも言われ、同性の血縁者で違う能力の方が珍しいと言われている。ただ、能力の遺伝に関しては実際にはまだ解っていない事の方が多い。

「話を戻すわ。鷺崎の縛りの関係もあって、私の能力で血を吸うと運命が判断されるの。それで、過酷な運命を辿る人の血ほど美味しく感じるのよ」

「つまり、俺の運命はとてつもなく過酷ってことか？」

翼は眉をひそめ、露骨に嫌そうな顔をした。だが、その態度に飛鳥は動じることなく答える。

「でも、過酷な運命というのは、運命に打ち勝ち続け、明日を求める人こそが、振り返った時に過酷であったと思うものでしょう？」

「そういうものか？」

「何にしても、今のあなたは何もしていないわ」

飛鳥は翼に睨むような視線を向ける。だが、翼は負けずに言葉を返した。

「ぐ……しかし、幼い頃に殺されて、記憶も奪われたという話はさつきしただろ？」

「その程度で過酷だと語ろうというなら、私はその頃にお姉様を失っているのよ？」

「なんでそんな自信満々なのか分かんが、俺はこれからキツイ人生のようだな」

「そうね」

……人の人生だからって、サラッと言いやがる……！

『これからあなたは過酷な人生を送りますよ』と言われたら、頭がおかしい奴でもなければ喜びはしないだろう。嫌がらせか、と思

う。

「……後で先輩の血でも吸って比べてみてくれ」

「美味しさを負けたときに、あなたがどんな言い訳をするか楽しみにしておくわ」

…… 本当に口が減らないな……

翼はやや渋い顔をして、少し話を変える事にした。

「で、他の能力はないのか？」

「そうね。吸血鬼とは全く違う存在だから、いわゆる吸血鬼の弱点はないわ」

「つまり、光も十字架もニンクも効かない訳か」

「その分、吸血鬼の能力は一切ないわ。不死でもないわよ」

そこで、飛鳥は翼を見つめて笑った。

……先輩みたいなのが增えるのは、本当に勘弁してほしいんだが。翼は短く息を吐くと、そのまま話を続けることにした。

「なんだか含みのある言い方とかしていたが、反応してはいけない気がするので無視するぞ。で、さっきの戦闘の時の赤い斬撃は何だったんだ？」

「ああ、見えてたのね。あれも血よ。ウォーターカッターと同じ原理ね。高速で血を飛ばすの」

「……あっさり言ってるが、それってかなりヤバい武器じゃないか？」

「ええ、ヤバいわ。当たるとズタズタよ。全部避けられるとは思わなかったわ」

「思わなかったってことは殺す気マンマンだな！なんかさっきまでいい話してなかったか!？」

「気のせいよ」

そう答える飛鳥は表情を変えないどころか、むしろ少し笑みの表情になっていた。

……うわあ。

うわあとしか感想が出てこないのも嫌なものだが、この場は他に

思いつかないような表情だった。まあ、底が知れないとか、そんな風に言ってもいいのかも知れないが。

「あ、えっと、あの武器……えっと刀じゃないな。刃って言っているのか？何なんだ？どこかから呼び出すってことは、あれも何か特殊な武器なんだろう？」

「ああ『血まみれのメアリー（ブラッディ・メアリー）』のこと？」

「なんともコメントしづらい名前だな」

「コメントしづらいなんて言ってるなら、歴史をちゃんと勉強しておく事ね」

「む……」

「ちなみに私は『マリー』って愛称を付けてるわ。ちょっと呼びにくいから」

「お前は歴史を大事にする気があるのかないのか、どっちだよ」

翼がツツコミを入れる。が、すぐに返された。

「歴史は歴史、武器は武器よ。戦場で呼び名噛んで死んだなんて、笑いものにもならないわ」

「お前は屁理屈こねさせたら一級品だな。先輩にも負けていない」

「そういうの、面と向かって言うものかしら」

……さつきから我慢はしてたんだがな。

「……言わないと聞かないからな」

「そうね。私たちは言葉でしか分かり合えないわ」

「じゃあ、少しは理解してくれるのか？」

「私は少し人に言われたくらいで、生き方を変えたりはしないわ」

……だとは思った。

翼は半眼になって飛鳥を見つめたが、その視線もあっさり流されてしまう。

「この不毛なやり取りにもそろそろ飽きてきた。なのでさっさと話を進めるが、『血まみれのメアリー』にはどんな能力があるんだ？」

「とりあえず『血液操作』で操れるわ」

「え？血液なのか？」

「そういう能力なの。一応『血を吸い過ぎた武器』って加護が付いてるみたいだけど、他に役に立つこともないから、私の能力に合わせた武器ね」

「……待てよ？」

翼は少し考えると、慎重に尋ねた。

「それって遠距離でも使えて回収可能で、手持ちしなくても近距離で使えるんじゃないか？」

「そんな便利な物じゃないわ。言い忘れたけど、血液ほど精密に制御できないのよ。質量が大きすぎるのが悪いのかしら？とにかく、手元を持つてくるとか、そのくらいに使える程度ね」

「質量が大きすぎるって……そんなものよくあんなに振り回せるな」「基本的に自分専用の武器というのは、手持ちすると加護で体感的な質量に軽減作用が掛かるのよ？つまり、手で持つてる限り、重さはほとんど感じないの」

「そうなのか。でも質量自体は存在するんだから……」

翼の疑問に対して、飛鳥はクスリと笑った。

「慣れてないと武器に振り回されるわね。だから専用の武器は長く使って修練を積むのよ」

「そうか……」

「でも、あなたは専用の武器は持ってないのね？」

「あ、いや」

「今のは基礎知識なんだから、持っているなら知っているでしょう？」

「あー、そうだな」

「……まあいいわ。で、私が教えられるのはこのくらいなんだけど、そろそろあなたの能力の話に移っていいかしら？」

「ああ。別にかまわない」

そう言っ翼は一度目を閉じると息を吸って、吐いた。そして目を開く。

「俺の能力……能力と言っ方がいいのか分からないが、俺の力は『不

「死の呪い』という」

「呪い……？」

「ああ、呪いなんだ。ここに俺が戦わない訳がある」

「いいわ。説明を続けて」

「俺の力は元々、先祖が永遠の命を求めたことから始まったものなんだ。そして、そのためには、恐ろしいほどの対価が必要だった」

「翼は一度視線を下げた。まるで、話することが恐怖と戦うように、強く拳を握りこんだが、直後に顔を上げると、決意したように真っ直ぐな視線になっていた。

「恐ろしいほど、ね。何かしら？」

「対価は……たぶん『争いを招く』だった」

「あら、随分と自信なさそうなのね」

「ハツキリとした記録なんか残っちゃいない。それに、俺の能力に関して誰も研究なんてしてないし、理解できる人間なんていないんだよ。さっきの不死に関する話と同じだ」

「でも自分の能力なんて、手足を扱うように理解できるものではない？」

「だから『呪い』なんだよ」

「なるほどね。でも、あまり恐ろしい対価に感じられなかったのだけれど？」

「……最初はみんな、そんな風を感じるんだらうな。」

「この呪いは、一度争いを始めると終わらなくなる。争いを解決するために争いを招き、その争いを解決するために……と、永遠に続くんだ」

「自分は死なないのでしょう？問題は何も無いわ」

「……そう、だからこの呪いは恐ろしい。」

「問題ないと思えなければ、誰もこんなもの始めなかつたはずだと翼は考える。」

「だが、周りの人は死ぬ。この呪いは死を招くんだ。つまり、要求された対価は『周りの人間の命』だった」

「……っ！」

飛鳥は『呪い』の恐ろしさを感じ取り、僅かに言葉に詰まる。

「周囲の人間を短命にして、自分だけ不死になるなんて出来るか？ たとえそれを選んで、最後に残るのは屍の山だけだ。実際にこれを始めた始祖も、受け継いできた先祖たちも、周りの人の死から逃れられずに孤独になっていった」

しかし、飛鳥もすぐに反論を再開する。

「……でも、たとえ争いの中でも生きていける人もいるわ」

「ただ、うちの家族は違った」

「家族……？」

「父さんと母さんと、弟。皆、戦闘に巻き込んだ。この呪いは隔世遺伝で、先代は祖父。家族で『呪い』があるのは俺だけだった。でも、戦闘に巻き込んでしまった」

「それで、どうなったの？」

飛鳥はおそらく無意識に身を乗り出し、まるで何かと戦うようでもあると思えた。

「幸い、生活に影響が出る怪我は負わなかった。けど、俺は自分しか守れなくて、家族ですら守りきれなかったのに。それなのに『また一緒に住もう』って言われたのが一番辛かった」

「え？どうして？」

「家族だから、信頼してくれていることも、大事にしてくれていることも分かっていた。でも、俺だって大切に思っていたんだ。なのに、あと一歩で殺してしまっただかもしれない。そう思うと怖くてたまらなかった」

「それはあなたのせいじゃないわ」

「そんな風に割り切れる訳ないさ。まして、この世で唯一の自分の家族の事を、な」

「でも、そんな風に言うのなら、今はその家族と離れているんですよ？」

「だけど、家族だけが大切な訳じゃない、生きていれば誰かと繋が

っている。他に誰か巻き込むのかもしれないのに、自分の家族が守られればそれでいい、なんて言える訳ないだろう」

「そんな事は出来ない？甘えるんじゃないわ。そんなの自己満足でしよう！」

飛鳥の鋭い声に、思わず何も言い返すことが出来なくなった。

「あなたが誰を巻き込もうと、知ったことではないわ。それでどれだけ苦しみもともね」

「戦場に立てば、必ず大切な人が傷つくと分かっているのにか？」

何とか言葉を返す、だが飛鳥はそれにもすぐに対応する。

「それなら、戦場に立たずに大切な人が傷ついたら、あなたはどうするの？」

「それは……」

「それにね、戦場で他人の心配のフリをしてるなんて、腹が立つだけだわ。どうせ悩むなら最初の理由の方がマシよ。あなたは復活の保証がない、だから死を恐れる。その方が分かりやすくてよっぽどいいわ」

「いや、そんなことなんて……」

と、翼の言葉に飛鳥が再び鋭い声を飛ばした。

「そんなこと？あなたの命でしょう？それをそんなことなんて言うの？」

「だけど、人は慣れてしまっただよ」

……普通に考えれば恐ろしい言葉だ。

死に慣れる。思わず自分の口から出た言葉が、結局自分の運命を表している気がした。

だが、飛鳥の反応は違った。

「そう、それが 慣れてしまう自分というのが怖かったのね」

「っ」

……その通りだ。

結局、呪いからは逃れられなかった。言い訳をしても、だんだんと死なない自分を受け入れてしまうことが逆に怖かった。

「やっとあなたの本音が少しだけ聞けたわ」

その言葉に、翼は思わず息を飲んだ。だが、

「……家族が大事だっていうのは本音だぞ」

「そう。それは私じゃなくあなたの家族に言うべき言葉ね」

……本当に何の話がしたいんだ。

やたらと自信満々に言われると正しい気がするが、全然関係ない話をいきなりしているので恐ろしい、と思うと同時に納得しかけた自分にため息を吐いた。

「しかし、一つ聞かせてくれないか……俺たちは人間なのか？」

「人間……ね。あなたも唐突な話をするわね。一応、理由を聞こうかしら？」

「俺たちは能力を持っている。考え、意志を持つてはいるが、地球上のどの生物よりも、遙かに強くなり、監獄に放り込まれた。それでも人間なのか？」

「そんなことで悩んでいたの？それなら私は簡単に答えが出せるわ。私たちは人間よ」

飛鳥は何の迷いもなく、はっきりと言い切った。

「どうして言い切れる？」

「だって、どんなに戦いに強くなっても、私たちは一人で生きていけないもの」

「そんなことで？」

「大事なことよ。それに、強さとか弱さとか知ったことじゃないのよ。私たちは一人では生きていけない。それは確かなこと、それで充分だわ」

「でも例えば獣だったとしても。群れも家族もあるだろ？」

納得いかない翼は疑問を重ねるが、飛鳥は自信満々に答え続ける。「ええ。そういうものもあるわ。だから人間だけが持っているわけじゃない。それは思い上がりよ。ただ、人間に繋がり不可欠ってだけよ。さっきあなたも自分で言っていたでしょう？」

「繋がり不可欠……ね」

「家族、親友、あるいは他人。繋がりを完全に切って一人になったら、私たちは生きていけないわ。だから、私たちはまだ人間なのよ」
「……なるほど」

「で、この話は一体何の意味があったのかしら？」

「そう焦るな。まあ昔、弟に言われたんだ。『全く死なないなんて、化け物みたいだ』ってな」

「なるほどね……」

「一度言われただけで、本当にそんなこと思ってる訳じゃないってのは分かっている。でも、感じたままの心なんだろう。だからこそ思うんだ。『俺は一体何者なのか』ってな……」

……そう、呪いから逃れられない俺はどんな人間から離れていく。

でも、さっきの飛鳥の言葉は、少なくともまだ自分は化け物ではないと思わせてくれた。

「そう。一言でそんなに心揺らぐとは、確かに家族が重要というのは嘘ではないよね？」

「ああ、俺の能力はあまり他人に教えられないから、知り合いも少ないんだ。それに、もしもの時にまた巻き込みたくないしな」

「そう。またそれなのね」

飛鳥は少し呆れるように息を吐いた。だが、翼は鋭い視線を返す。
「俺は、自分の力を使えばどうなるかくらいは、分かっているつもりだ」

「それは、自分は死なない場所に居たくて、誰も傷つけたくなくて、誰も失いたくないってことじゃないのかしら？」

「……違う。俺は、自分から大切なものを傷つけたりはしたくない、それだけだ」

翼の否定にも、飛鳥は疑問を続ける。

「それで死から逃れて、争いから逃れて、あなたは何を得るの？」

「俺は」

「死を恐れてでも、大切な物をその手で守り抜いて、生き抜くため

に、利己的にならないの？」

答えるより早く強い言葉が来る。だんだんと、飛鳥の声も強くなっていた。

「この手は、守るべきものまで傷つけてしまうから」

「それは、楽に生きるための言い訳だわ」

そして、飛鳥ははつきりと言い切った。

「あなたには楽をして生きる、なんてないのよ。生き抜いて苦しむのよ」

「それはそっちの勝手な決めつけだろう？」

言い返す言葉にも耳を貸さず、飛鳥は言葉を繋ぐ。

「でも、実際に一つ決まっていることだわ。生きて、生きて、生き抜いて。そして、最後には死ぬ。それは、誰であると同じであるはずよ。そして、あなたはそれをしていない」

「っ」

翼が言葉に詰まったその時、

「一人の人間として生きたいなら、もっとうつするのか考えなさい」

飛鳥はこれまでにない強い口調ではつきりと、

「大体、巻き込みたくないとか、傷付けたくないとか、そんなもの全て、利己的な思いの塊よ」

続けざまに言葉を重ね、

「どうせ利己的な自己満足なら、誰かを守るために力を使う覚悟を決めたらどうかしら？」

大げさな手振りも合わせると、

「そして、決めるのなら 死ぬまでに守れるもの、守り抜いて見せなさい」

その声で貫き、

「たとえわずかでも、守り抜いたらあなたの勝ちよ。簡単でしょう？」

最後にフツと笑みを加えた。

……くそ、本当に簡単そうに言いやがる。

「でも、それがどれだけ大変か。俺がどれだけ失うか、分かっているのか」

「私は分からないわ」

「……何？」

「だって、私はあなたじゃないもの。分かるはずがないわ」

「これまで散々人のこと分かっているような話をしておいて、何なんだ？」

「でも、あなたと私は、似ているところがあるでしょう？」

「似ている？」

「失うことの怖さを知っている、ということよ」

「……知っているから、こうしてためらっているんだろ？」

「それはいいことなのだと思うわ。絶望を知っているものが悩んで答えを出すことには意味がある。それは本人だけじゃない、他者の希望にもなるのだと私は信じているの」

「随分君としては楽観的だな」

「あなたほど悲観していないだけよ。だから必ず、答えを出して」

その言葉には、強い意志があったと感じた。なので、

「……分かったよ」

と答えた。

「覚悟を決めるのはあなたよ。他の誰にも、あなたの覚悟は決められないのだから」

「今まで散々口を出したのは？」

「これはただの助言。決断するのはあなたよ。決めるのも、責任を取るのもあなた」

「……それは随分と都合のいい言い方だな。」

そう思いながら、翼は少し疲れた頭で苦笑する。

「はあ……相変わらずの物言いだな」

「あら、忘れていたようだけど、私もあなたと繋がりがある人間なのよ？」

「む」

「そして、私は簡単に失われるつもりはないわ」

……つまり、自分はずっと隣にいてやるって言いたいのか？

「同じことを言ってくれる人、他にもいるでしょうね。つまり、今のあなたが勝手に一人になろうなんて、おこがましい考えなのよ。分かった？」

……あなたは一人じゃない、ってか。

「一人になろうとするなら、追いかけてでも捕まえてみせる。だってあなたは、お姉様と繋がっているのだから」

……最後はそこなのか。

第20章「星闇の再会」

飛鳥は部屋を出ようとした翼を呼び止めた。

「帰ってしまふ前に一つ、つまらないことを聞いておくわ」

「なんだ？」

翼の表情が訝しむようなもの変わる。

「あなたは戦場に出て、敵が殺せないとかそういう甘い理由で戦えない訳ではないのね？」

「それが甘いのかは知らんが、戦いの場にそういうものは不要だと覚悟はしている。まあ俺は積極的に人殺しがしたいわけでもない

そんなの綺麗事だけだな」

……そうね、確かに今までの話からその予想は付いていたわ。

だからつまらない質問だと思ったのだが、まだ話は終わっていない。

「でも、そこまでの覚悟があるのに、ためらわせる力って……いえ、これは無粋ね」

「というより堂々巡りになる。さっきの話をもう一度、最初からしたいなら構わないが？」

だが飛鳥はそこで、予定通りに本題へと切り込んだ。

「それは遠慮しておくわ。ただ、それならなぜ初めて会ったときに私を止めたの？」

「あれは戦闘に見えなかったからだ。それこそ、普段は戦わない人を一方的に殺そうとしてるように見えた」

「それは随分と酷い見方だわ。そういう輩を捕まえていたのが私だったのに」

あつけない返しに飛鳥は満足していた。不満を口にしつつも表情では笑みを浮かべるのを抑えない自分がいる。

「武器の見た目と、戦闘法に問題があると思うんだが。あの時も能力を生かすために、出来るだけ血を浴びて戦ってたろう？」

「まあそうね。見た目にこだわって負けるなんて勘弁だわ」

……私を随分とよく見ているのね。

自分以外の他人の視点。それは自分の存在にとって大事なものだと思う。人間は一人では生きられないと散々言っただばかりだ。

「……はあ、もうそれでいいよ」

「結局、誤解なんてすぐ解けるからいいのよ」

「俺が逃げようとした事と同レベルだな」

「同じではないわ。私は立ち向かって誤解を解くもの」

「相変わらず自信满满だな」

翼の相変わらずと言っ言葉が、急に可笑しく感じた飛鳥は少し笑った。

……だって、まだ出会ってから二日目なのに。

先ほども言っていたはずだ。おそらく無意識に出ているのだろうと思う。

「急に笑ったりしてどうした。本格的におかしくなったか？」

「なんでもないわ。しかし、あなたと私は本当によく似ているのね」

「えっ？」

「境遇、立場、居場所？何と言えればいいか分からないけれど、そういうものが似ているわね」

急な話題の転換に少し翼は戸惑ったようで、しばらく考えてから答えた。

「……小さいころに京花を失った、って話か？」

「それだけじゃないわ。『逸能連』の事を隠さなきゃで、私も学園に知り合いは多くないの」

……そう、私とあなたは似た者同士ってことよ。

「なるほど。その話もそうだな。君は仲間を、俺は家族を失いかけたわけだ」

「それから能力の方も、お互い変な縛りが代々続いている家みたいね」

「そう聞くと少しは親近感が湧いたよ」

……それは良かったわ、今のところお姉様への唯一の手がかりだ

し、ね。

「さて、そろそろ時間も遅くなってしまったし、門まで送っていくわよ」

飛鳥は翼を見送ると、門に佇んでいた人影が話しかけてきた。

「さて、翼くんの覚悟は決まったのかな？」

不敵な笑みを浮かべるその人物は、隠れることもなくそこに立っていた。

「盗み聞きとは、あまりいい趣味ではないですね。会長さん？」

「ふむ、盗み聞きとは随分な言いぐさだな。私はこんなに堂々としているのに。それに、これでもか弱い生徒の安全を守るために送った帰りだよ？」

だが、飛鳥は千鶴の言葉を無視して話を進めた。

「……そうしないと相手のペースに飲まれる。」

「それで、なぜ私たちの会話を盗み聞きする必要があるんです？あなたはまだもう知っているでしょう？私の能力も昼間にお話ししましたよね？」

「つれないね。綺麗な女の子に会うのに理由が必要とは」

「……いい加減にして欲しいわ……！」

熱を込めてまくし立てる言葉さえ涼風のように受け流されることに、飛鳥は苛立ちを感じるが、ここは相手をしてはいけなないとすぐに判断する。

「本気で帰っていいですかね。そういうのは副会長とやってください」

「……こんなのに負けていないとか、冗談じゃないわ。」

翼の考えも時々分からないところがある。戦闘で簡単に後れを取るつもりはないが、口先の勝負は別の話で、そもそも自分の担当で

はない。

「もう少しいい反応が欲しいところだね。まあいい。一つだけ言うておこうか」

そこで、不意に千鶴の表情が真面目なものに変わる。

「なんですか？」

「君の能力は　嘘だ」

「　っ」

……やられたわ。

話題の間隙を突くような一言に、反応してしまった。その言葉で心を動かされたことが何より悔しかった。だが、これ以上失態を晒すわけにはいかない。

「動揺したかね？ただのかまかけだよ。明確な根拠はない、おおむね勘だ」

……そのはずよ、そんなに情報を与えてないもの。

しかし、改めて千鶴の恐ろしさを実感する。思えば直前の会話も油断を誘う罠だったのだろう。だが、その会話につられたのも自分だ。もつと警戒すべきだった。

「何故そんなことをする必要があるんですかね？」

「私としても、出来るだけ足元は信用したいのだよ。ま、キミはその類ではないだろうがね」

飛鳥の疑いの言葉さえ、用意されたような反論によって口をつぐむ羽目になる。だが、それでも飛鳥は口を開く。

「戯れで妙な事はなさない方がよろしいですよ」

「全くだな。今日はこれで退散するでしょう」

千鶴が行ったのを確認し、飛鳥は門の中に入っていく。そして、空を仰いで一人呟いた。

「お姉様……私はやはり嘘つきなんでしょうか？」

一樹は、再び塔へとやって来ていた。

……今日も居るだろうか？

正直なところ半信半疑だった。本当は小春にでも居るか尋ねたいところだが、ここで会っていることが知られていると分かっても、自分から言い出すのは気が引けていた。

「行ってみれば分かるだろう……」

一樹はいつも通りに扉を開き、光を灯して階段を登っていく。そして一番上へと辿り着き、光の扉に手をかけた。

……いつも開けている扉を開けるだけなのに、いつもよりも少し重いような気がした。

扉の向こうから、星明かりが差しこむ。

「また、会えたね」

……その言葉をどちらが発したのだろうか。

その光に照らされていたのは、昨日と変わらぬ少女の姿だった。

第20・5章「平行世界の幕間話」

千鶴「さて、生徒会長の高宮千鶴だ」

鶯「副会長の白羽鶯だ」

千鶴「この名乗り、意味あるのか？」

鶯「書いてる人に聞いてくれ」

千鶴「あと、この章題を「まくま」と読んだならば、もっと日本語を勉強したまえ」

鶯「そういうこと言うな。確実にツッコまれるから。ちなみに正解は「まくあい」だな」

千鶴「なぜこんなくだらない豆知識のようなことをやっているかといえば、作者が読み間違えたからだ」

鶯「……それって許されることなのか？」

千鶴「知らんな、まあサクツと注意事項といこう」

この章を読む上での注意！

- ・ここまでの章の話は盛大にネタバレします。第01章も読まずにこれから読まないように！
- ・ここでの話は本編に関係しません。時間軸、場所、完全にパラレルなオマケと思ってください。
- ・そのため最初に書いたような「作者にキャラがツッコミを入れる」など、やや危ないネタも使います。
- ・オマケなので文章的におかしい部分があると思います。ネタであることが理解できる人が読んでください。真面目な話もしますが、
- ・なので、これを読んで作品の雰囲気壊れた等の苦情は一切聞きません。覚悟してから読んでください。
- ・これ以降、登場人物名は基本的に頭文字のみになります。手抜きとか言わないで。

・この話の挿絵を描いてくれとか言われても、作者にそういうセン

スはないので。むしろ誰かやってください。

ち「ということだ」

つ「これ、いきなり注意事項で遊んでるだろ」

ち「まあそうあまり野暮なことは言うものではない。それに、ここからツッコんでいたら体力が持たんよ？」

つ「いや、待て。最後のはなんだ？」

ち「おや、言っていないかったかね？今、私たちの格好は　水着だと」

つ「格好つけて言ってるが、ただの変態だな！」

ち「まあオマケでサービスだからな」

つ「ぶつちゃけすぎだ！お前何様だよ！」

ち「学園の最高権力者様だよ。鷓を水着になどすぐ出来る」

つ「職権濫用だな……」

ち「いや、逆に考えてみてくれ、本編で急にサービスが入って冷めることはないんだと」

つ「まあ、あまりそういう層にアピールしない話の展開だしな……」

ち「ぶつちゃけ、血の雨が降りそうなお話ばかりで、とてもサービスなんてやってられないからな」

つ「私たちも戦つか仕事してるかどっちかの感じだしな。でもテコ入れて水着回はちよつと……」

ち「だろつ？真面目にそういう話を考えるより、絵のないオマケで水着の話だ！」

つ「待て。猛烈に必要な気がしてきたんだが」

ち「何を言う。今！この瞬間！鷓の水着を堪能できるのは私だけなのだよ！？」

つ「お前はオマケでも本編でもやってること同じじゃないか？」

ち「鷓への愛は変わらないよ。ああ、貴重な鷓の水着姿！」

つ「訂正しよう。本編より悪化しているな」

ち「さて、私たちは何の話をすればよかったのかね？」

つ「急に素になるなよ。流石について行き辛い……読者が」
ち「読者か。それは確かに、な」

つ「さて、話を進めるが……ここに一つ手紙がある」

ち「唐突だな。差出人は「日向 葵」……作者か」

つ「ものすごく胡散臭いが、開けてみよう。えー「皆さんの能力を解説してください」だと」

ち「ふむ。今の流れは必要だったのか？」

つ「ああ、まだ裏に文章があった。どうしても一度やってみたかったのでやった。後悔はしていない」だってさ」

ち「しかし、私たちの能力などネタバレだらけで解説など出来ぬだろうに」

つ「まあ、やってみれば何とかなるんじゃないか？裏設定もあるし」

ち「では、私の『念動力』サイコキネシスからいこう。知つてのとおり最強だな」

つ「この作品は最強が多すぎる」

ち「冷静なツツコミだ。まあ、ここまで読んで私が主人公とか、最強すぎるとか、主人公活躍しろよとか思うかも知れんが……」

つ「いや、待て……それはネタバレじゃないのか？」

ち「このぐらい言ってもいいだろう？水着でサービスしているのだぞ？」

つ「お前は本当にやりたい放題だな」

ち「とりあえず、この後の主人公には注目、というところだ」

つ「そんなハードル上げて大丈夫なのか？」

ち「私は主人公と言っただけで、この作品には主人公が二人いるの
でね」

つ「卑怯な言い方だな……」

ち「玉虫色の答え、とでも言ってくれたまえ」

つ「でも、お前が最強……いや、私からしたらお前が最強というのが納得いかないが」

ち「そうだな。私もいろいろと弱点がある。しかし、そう易々とそれを晒したりはしないさ」

つ「あ、弱点を知っている私だから最強に見えないのか」

ち「他の者も同じだよ。強い者も皆、弱点がある。それを知ればあまり強いと感じぬかもしれん」

つ「なるほどな……」

ち「ちなみに『サイコキネシス念動力』は伝承・神話などが元ではなく、超能力として知られていたものを元に行っている」

つ「要するに『手を触れずに物を動かせる能力』だな。しかし、千鶴の場合は規模がな……」

ち「それだけ強力なのだよ。まあコントロールも難しいがね」

つ「ふーん……」

ち「どうしたね鶯？そんなに見つめられると照れてしまっよ？しかも水着で！」

つ「流石にそのネタだけで引つ張るのは、苦しくないか……」

ち「さて、これ以上は壮大なネタバレとなりそうなので、そろそろ鶯の話にいくとしよう」

つ「私の『グリフォン傲慢狩りの合成獣』か……これ漢字の方が無茶苦茶だよな」

ち「いきなりツツコミから入って大丈夫かね？」

つ「いや、一応言っておくべきかと思っただけだ。能力は作中をみてくれ」

ち「ふむ。伝承も作中に書いてしまったね。鶯の翼と上半身、ライオンの下半身だったか」

つ「鳥・獣の王の合体ってことで、よく王家の紋章に使われたらしい」

ち「ちなみに、伝説の生物として歴史は古いそうだな。鶯の力は長く伝承されているのだな」

つ「あと、裏設定の話だが……この作品、学園側は全キャラ鳥が名前のどこかに入っているだろ？」

ち「ああ、確かに言われてみればそうだな」

つ「これ、当初は能力者とそうでない人が入り混じる予定で、能力

者は鳥の名が入る予定だったらしい」

ち「待て。説明しきれていないぞ？」

つ「焦るな。それで、能力者の始まりは「飛ぶ人類」を想定していたらしい。なんで、空を飛ぶ能力は何としても持たせたかったんだと」

ち「それで『傲慢狩りの合成獣』^{グリフォン}か。強さとのバランス取り、というところかね？」

つ「まあそんなもんだらう」

ち「さて、秋時の『魔法の弾丸』^{マジック・バレット}だが……」

つ「語れることは多くないな。作中でほとんど語っているし」

ち「能力や銃は作中で確認してくれ。一応省いてしまった背景を語っておくか」

つ「そうだな。まあ伝承中心だから『魔弾』や『魔弾の射手』がモチーフだと思われるかもしれないが……」

ち「実は、イメージしていたのは1963年のケネディ大統領暗殺事件の『魔法の銃弾』だったと作者は言っている」

つ「前者だと『撃てば必ず当たる』能力になってしまっからなあ。

その点『軌道を自在に操る』にはこっちの方が都合がいいらしい」

ち「ただ『魔法の銃弾』の方も『魔弾』を元にして名付けられただけで、特に変わりはないのだがね」

つ「現実にあつた事件、つてだけだしな。しかも胡散臭いところもあるし……」

ち「おや、それは間違いだよ鵜。『現実に起きた事件で書かれた報告書の中で結論付けられた事象』だ」

つ「滅茶苦茶だな……どれだけ事実と異なっても、報告書の中ではそれが事実、つてヤツか？」

ち「それをここで鵜と討論する気はないが、それによって『認識された』ことが能力を固定させているのだよ」

つ「だんだん話が複雑化してきてないか……？」

ち「なに、複雑ではないさ。例えば歌を聴いたとき、「間違った歌

詞」で覚えていてもそれがその『認識』ならそう聴こえるだろう?」

つ「唐突に話が飛んだな……だがまあ、経験はあるが」

ち「それが歌詞カードなど「正しい歌詞」を見たら、その瞬間に『認識』が上書きされる。聴いているものは同じはずだがな」

つ「なるほど。存在を『認識される』ことが重要、ということではないんだな?」

ち「そうだな、周知され、認識され、それによってこの世に固定される。大事なことだよ」

つ「同時に、受け取る側で物事なんてどうとでも変わるとも言えるな……」

ち「私の鶯への愛は不変だがね」

つ「それでオチたと思ったら大間違いだ!」

ち「ま、こんなの所詮、脇道話だ。真面目にやったところで面白くない」

?「で、千鶴。そろそろ妾の出番か?」

ち「なんであなたがここに居るかな」

?「この辺りが妾の出番と聞いて、会いに来たのであるが?」

つ「いつも通り迷ったんですね。お帰りはあちらです」

?「随分と妾をぞんざいに扱うな。わざわざ出向いてやったというに」

ち「あなたが大人しくしていてくれる方が余程有難い。探す手間がない分ね」

つ「こればかりは同意するしかないな」

?「むむむ……こんなに可愛らしい妾がぞんざいな扱いとは、納得いかな。さーびすとやらではなかったのか?」

ち「私は子供は相手にする気はないのでね」

?「子供?主と妾で」

つ「はい。そこまで!」

ち「む。ネタバレか」

?「それはいかぬな。干渉しすぎるのは好まぬ。また会おうぞ」

ち「ふう。予想外の飛び入りだったな」
つ「私も秋時が来るものだと思っていたんだがなあ」
ち「しかし、そろそろ終わりのようだよ。最後のアンケートコーナー、だそうだ」
つ「何をアンケートするんだ？」

以下の質問に良ければお答えください

1、第11章「王者の力」の最後で千鶴の力が念動力サイコキネシスだと明かされたとき

2、第16章「王者の決着」で水月が戦闘に入ってきた事について

1：予想外で面白かった

2：予想は付いていたけれど面白かった

3：予想外だったけどつまらなかった

4：予想通りでつまらなかった

5：その他（出来れば何か記入してくれると嬉しいです）
の何番に当たりますか？番号でお答えください。

116

ち「つまり、作者はこの辺りが気になっているということなのだな」
つ「いやまあ、私の活躍はどうした」

ち「鵜の活躍は……なあ」

つ「言葉を濁すなよ……あと、ここに呼ばれてすらいない秋時はどうした」

ち「あいつの活躍について聞くことがあるのか？」

つ「……私たち姉弟はアンケートにすらならないのかよ！あと、なんで唐突にアンケートなんだ!？」

ち「鵜は随分と根本的な所にまでツツコミをいれるな。ま、ここで日付が変わるので一つの区切り、という事だそうだ」

つ「かなり時間がかかったような気がするが、これで一日なのか……」

ち「正確には二日だ。これで初めから読み返すと、また印象が変わ

るように作ってある……らしいぞ」

つ「お前の印象はあまり変わらないがな」

ち「もちろん、アンケート以外にコメントしてくださっても構わない。ここはネタバレし放題だからな」

つ「それはスルーされるフラグじゃないのか？」

ち「大丈夫だ。その時は私たちがコメントまでこの会話を続けければいい」

つ「勘弁してくれ。というか、いつまでやるんだ？」

ち「いつまでもやるさ、何せ私たちは水着なのだからね！」

つ「最後までそれかよ！というか、冬に水着だと寒いだろ！」

ち「最後にそのツッコミかね？ここは暖かい場所だが……次は温泉のフラグだね？」

つ「……もう勘弁してくれー！」

ち「……オマケにしては容量ありすぎないだろうか。これは」

つ「何も考えずに書けばこんなもんだろ。それでも普段は真面目に考えて書いてるらしいぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5163z/>

クロス・エンド 0・1日目

2012年1月6日01時47分発行